観光地域づくりオーラルヒストリー <第9回>

観光を「異日常性」(異なる生活文化)を介した「生活者交流」と 捉えた観光地経営を期待したい

> 城西国際大学観光学部客員教授 阿比留勝利氏

1943(昭和18)年長崎県対馬市厳原町生まれ。1967(昭和42)年3月早稲田大学第一理工学部建築学科卒業、1969(昭和44)年同大学院理工学研究科建設工学専攻都市計画専修修士課程修了、1973(昭和48)年3月博士課程単位取得退学。

1970 (昭和45) 年4月~1986 (昭和61) 年3月芝浦工業大学兼任講師、1970 (昭和45) 年4月 (株) 日本計画技術集団設立参加を経て1973年3月退職。1973 (昭和48) 年12月 (株) 環境計画研究所(福岡)、JAED日本環境ダイナミックス(東京)を統合して(株)ジェド・日本環境ダイナミックスを設立、代表取締役に就任。以後、全国各地の観光地をはじめ中山間地域、離島等の地域振興に携わる。その後、2001 (平成13) 年岐阜県立森林文化アカデミー非常勤講師(~2010年)を兼務。2005 (平成17) 年4月城西国際大学経営情報学部教授に就任し、2006 (平成18) 年4月から新設の観光学部に異動。2013 (平成25) 年4月から観光学部客員教授、大学院国際アドミニストレーション研究科教授(観光まちづくり、観光地経営等担当)。

これまで日本観光研究学会理事、国土庁地方振興アドバイザー、総理府観光政策 審議会専門委員(国際観光モデル地区)、総務省地域再生プロデューサー事業アドバイザー(観光)及び地域経営の達人、経済産業省集客交流サービス産業検討委員 のほか、長崎県総合計画審議会委員、山形県地域振興アドバイザー、長野県観光開 発審議会(20年余)、神奈川県、岩手県の観光審議会委員、千葉県景観審議会委員、 また(社)日本観光協会、(財)地域活性化センター、(財)電源地域振興センター等のアドバイザー等を歴任。

現在、国土交通省国土審議会特別委員(離島振興対策分科会)、内閣官房有人国境離島保全分科会(略称)委員、鴨川市、大網白里市都市計画審議会委員等。

写真 1 阿比留勝利氏への 取材風景 (2016年2月8日、(公財) 日本交通公社ライブラリー 会議室にて)



1. 「観光」への接近

●対馬の暮らしが自然や文化を楽しむ素地を育む

私が生まれたのは、長崎県にある国境の島、対馬です。長崎より福岡の方が近く、博多まで海路 132km ですが、韓国釜山までは対馬海峡の西水道を隔てて 49.5km とさらに近く、空気が澄むと釜山周辺や市街地の夜景が見えるほどです。現在の人口は 3万4千人強、老齢人口比率は 30%弱(22 年国勢調査)で、かつて 7万人いた人口も減少し高齢化も進んでいます。県立対馬高校を卒業するまで島で暮らしました。阿比留一族は平安時代末頃まで島を牛耳っていた豪族のようですが、以後、宗氏の時代に変わりました。阿比留という姓は今でも対馬で一番多いと思います。

対馬は照葉樹林が美しい島ですが、ヒトツバタゴ、コウライキジなど大陸系の動植物やアムールヤマネコの亜種ツシマヤマネコ、対馬馬などの固有種も生息しています。古代の防人配備から始まり戦前まで要塞の島。今も国境の島として国防・国土管理の役割を担っています。海域を含めて文化の十字路といわれ、平時は大陸往来の玄関口として遣新羅使などを介した大陸文化や交易の窓口、刀伊の入寇、元寇、対馬沖海戦(日本海海戦)など有事には国防の最前線でした。国境性と国際性に彩られた歴史、文化が継承されています。

私の実家は歯医者で、7人兄弟の末っ子です。五歳の頃、国境故に敗戦早々進駐してきた米軍のジープに轢かれ、今でも国境離島の因果を体験していますが、おかげで?ユニバーサルツーリズム、ヘルス&ウェルネスツーリズムに強い関心をもっています。



写真2 厳原町の石垣の街並み

資料:阿比留勝利氏提供

中学に入ると傷が癒えて、曲がった足ながらも少し走れるようになり、体力がついて海遊び・山遊びができるようになりました。伝馬船の櫓こぎを覚え、釣り、うっつめ(鳥罠)かけ、目白おとしや飼育、昆虫採集、松虫・鈴虫捕りなど身近な環境で楽しめるものを多く身につけました。海に飛び込んで素潜りでサザエやアワビを採るのも夏休みの日課でした。

年の暮れになると、親戚の山から梅・松・ユズリハ・モロモクなどをもらって門松をつくり、元日には山越えをして磯場でご来光を拝みながら壱岐や沖の島の島影を遠望しました。初詣は神宮皇后を祀る八幡神社です。彼岸にはお寺参り、盆には精霊流し、お地蔵様巡りと港祭り、秋には紅葉狩り、キノコ狩りなどを楽しみました。中でも最も好きなのが海釣りで、大学時代までは夏休みに帰島すると、タイ釣り、カツオ・ヒラマサ・シイラのホロ引き漁(漁師流トローリング)、イシダイ釣り、近場のベラ・アジ・ホシカリ(カサゴ)・メバル、クロイオ(メジナ)、チヌ(黒鯛)、ウナギの穴釣りなどを楽しみました。釣ったものは食べることを原則とし、魚を三枚に下ろす技も身につけました。漁師さんとともに、生きた小鯛を餌にジャンガリという鋼鉄線の仕掛けを付けて2mを超えるサメ釣りも体験しました。

今、グリーン&ブルー・ツーリズムが浸透する中で、幼少期から大学時代までの 島での遊びや歳時記の体験をノウハウとして活かせる面が少なくありません。

●「外界との交流」が島の存立基盤であること知る

対馬は急峻な山場が多く平坦地は3%程度です。古くから米・穀物など生活物資の多くを本土や朝鮮半島など「外の世界」に依存してきました。対馬周辺海域は日本有数の漁場で、戦後しばらくは近海が鰺、鯖そしてイカなどの好漁場のため、漁期には五島、平戸、生月などの漁船団が訪れて賑わいました。しかし、魚が獲れなくなると漁船団の来航も減り、高度成長期で若者も島を離れることが増えました。離島振興法による公共事業等で現金収入は増えましたが、全体に元気が萎えてきました。

海が荒れれば対馬・壱岐・博多間の船が欠航し、特に冬季はアナジと呼ばれる季節風が厳しいため長い時には3~4日欠航します。すると生活物資が乏しくなって、島の近場でとれた魚食が中心になる。東京の人に話すと羨ましがられますが、しかたなしに鯛を食べていました(笑)。

一般に島では、普段見慣れない島外からの来客には怪訝なまなざしを向けます。 一種の通過儀礼で素性や事情がわかれば歓待する。来島者に対する警戒心がある反 面異人歓待の文化や寄神(よりがみ)信仰が見られます。対馬も同様です。よく我 が家にお客が来ると、飼っている鶏をつぶし鶏肉と地魚、野菜を入れた郷土料理の 「イリヤキ」(寄せ鍋)で歓待していました。中学時代、我が家の客人接待時の鶏 の解体は私の仕事でした。残酷とも思わず、お客が来ると出番があってどこかうれ しかったですね。こうした生活体験も遠因ながら観光・交流に関心を持つ素地にな っているのかもしれません。 当時、命に関わる救急患者や高度の専門治療を要する病人は博多(福岡市)まで 運ばないと十分な処置ができませんでした。後述する母の場合もそうです。こうし たことから、異人歓待もさることながら、島は域外との連携があって初めて生きら れること、流通基盤(航路、空路、情報網)こそ島の存立の生命線であること、を 理解するようになりました。

●はじめての修学旅行 ~人が来ることで成り立つ観光地の存在が奇異だった~

私が初めて島を出たのは小学5年生の春です。母の福岡での入院に同行し、一ヶ月くらい病院で暮らしました。その時電車に乗せてもらい「都会」を見たわけですが、都市ガスの臭いに違和感をもった記憶があります。島との異質性に楽しさは感じたものの、都会の猥雑さには疲れました。当時は、昭和20年代の後半で、まだ一般に観光旅行をするような余裕もなく、子ども心に気にとどめた島外旅行はせいぜい兄の新婚旅行くらいでした。

中学3年になって九州半周の修学旅行で福岡、熊本、別府、阿蘇などの有名観光地を初めて訪ねました。阿蘇の雄大さに感銘を受け、別府の坊主地獄、海地獄などに驚きました。珍しい体験ばかりでしたが、何よりも温泉で人を集めて消費で成り立つまちを初めて実感して驚きました。

高等学校の修学旅行は3年生の夏で久留米の石橋文化センターから関西(京都・奈良・大阪)、東京、日光まで代表的な観光対象を周りました。1週間余りの長丁場で、夜行の鈍行列車では座席より楽なので通路に新聞を敷いて寝ました。京都あたりまでは元気がありましたが、東京駅に朝5時過ぎに着いて顔を洗うと早朝から浅草見学。この頃になると疲れから眠くて記憶もまだらで、何を見たかあまり覚えていません。翌日は日光に行きましたが、私は疲れと風邪で倒れ、大学生の兄のアパートで1週間養生して一人帰島。初めての一人旅の体験でした。

●漁師をあきらめて建築学科へ

高等学校を出たら大学に行きたいと考えていました。私は末っ子で進路に制約もありませんでした。海と漁が好きだったから、水産大学を出て漁師にでもなろうかと考えましたが、足が悪いので船上でバランスがとれないなどから不向きだと知りました。

次に好きなのは大工仕事。そのほか音楽や絵なども好きだったので「人間くさい?理工系」をイメージして建築を志望しました。結果、大学では長崎出身の建築 家武基雄先生にご指導いただきました。

●ジャズ研入りで音楽を、友人との九州一周旅行やラリーで移動の面白さを知る

大学では釣りクラブとモダンジャズ研究会の演奏部に入りました。先輩が連帯保

証をしてくれたアルトサックスの月賦を印刷屋の版下や図面トレース、科学技術庁が支援する外国語建築雑誌の要約バイトで必死に支払いました。ジャズ好きは今も 観光や文化イベントへの関心の下地になっていますね。

一年の夏には、建築学科の親友3人で九州一周旅行をしました。気ままな観光旅行を初めて楽しみました。鹿児島で女性ガイドが添乗する観光タクシーに初めて乗りましたがよい印象を今でも持っています。

このほか在京保証人の子息達と3年間日産のナイトラリー(タイムラリー)に出場しました。夜9時に山手線大崎の日産自動車社屋を出で翌日昼頃にゴールにたどり着く徹夜のタイムラリーです。当時まだ電卓はなく計算尺とヘッドライトでナビゲーターをつとめました。交通事故の経験から自動車への関心は高くなかったのですが、このラリーで何よりも自家用車のもつ個室性と風を感じて走る移動の魅力を知りました。

●学費値上げ反対運動に参加してダイレクトに社会性ある仕事を模索

大学3年の頃、学費値上げ反対運動が起こりました。建築学科の学生は問題意識が旺盛で私も末席ながら反対運動に参加。機動隊の出動、本部封鎖などにも出くわしました。

対馬は保守的な風土で朝からそのような訓示を聞いて育った私にとって、これは 大変革命的かつ新鮮な体験でした。正直戸惑いもありましたが、次第に伝統・共同 体志向に染まって生きてきた自身の在り方に疑問を持つようになりました。そして 自由に生きるというのは大変な喜びだと感じ、以来、「勝手に生きよう」と(笑)。 今思えば、大学に入って一番活き活きした時期で、あの運動に参加したことが自立 の引き金になった感じです。

【なぜ観光の道を選んだのか】

●都市問題や余暇社会論への関心からマスレジャー論を卒業論文に

大学卒業の頃は高度経済成長のまっただ中で、工業社会や車社会化が急激に進み、 東京五輪に続く大阪万国博覧会の開催計画もあって、都市開発、マスレジャー、自 動車観光の増大などにも関心をもつようになりました。

4年生の時、大学院の建築計画研究室とは別に都市計画研究室ができました。武基雄先生と吉阪隆正先生が指導教員でした。武研究室で鎌倉の古都保存調査を行い、それを活かして卒業論文を書くことができるというので友人と参加しました。友だちと4人で1ヶ月ほど長谷寺に住んで地域を歩き回り、現地調査やアンケートなどをする中で、風致破壊、鎌倉の自家用車観光と生活阻害などの問題を実感しました。鎌倉は古都で環境が優れています。当時大都市圏ではスプロール現象が著しく、優れた環境への居住志向が強かったため風致地区の裏側に宅地造成が入って山が削

られたり、観光交通の集中による生活阻害など多くの課題がありました。この調査の中で古都保存、さらに地域社会と観光との調和問題(観光公害等)に私の関心は高まりました。当時は余暇社会論などが盛んになりつつあったので、鎌倉の都市調査を踏まえつつ、私は「大衆社会におけるマスレジャーの発展的考察」というテーマで大衆レジャーの将来性について総論を書きました。これが将来観光に係わる入口になったと思います。ホモ・ルーデンスなど、その頃読んだ本は今も持っていますが、遊びや余暇に対して社会的な成長性が予感され、観光分野にも関心を持つきっかけだったように思います。

●就職はせず、都市・地域計画を学ぶために大学院へ

当初は大学卒業後に建築設計事務所に就職するつもりでした。しかし、学費値上 げ反対運動に関わり、その頃乱読した思想書、技術論等の影響、古都保存調査の体 験などから、設計業界への就職の関心が薄れました。それよりも直接的に地域社会 に関わる仕事がしたいと思い、都市・地域計画を学ぶために大学院を選びました。 面接試験で志望研究室を含む4人の教授から「何を研究するのか」と聞かれ、当 時激しい過疎化で有名だった奈良県大塔村などに飛び込んだりしていたので、「過 疎地振興と余暇問題(観光・交流)をやりたい」と答えました。

都市開発にも興味があったので、「地域再開発事業の実施プロセスにおける当事者の移転問題への対応方法を学びたい」というような返答をした記憶があります。 今思えば、前者は観光開発分野、後者は、結果的に後で係わることになる、土地区 画整理やダム水没者の移転・生活再建問題と関連地域開発(ダム湖、移転替地を含む観光による雇用創出等)への関わりにつながったようにも思います。

【観光との出合いはいつ、どこで…】

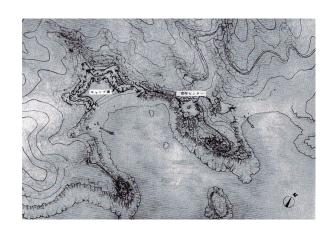
●大学院の修士課程で初めて観光施設計画を手がける

大学院の都市計画専修の修士課程では座学と実務研修を合わせたような課題があり、昭和 42 年度に早大初の観光分野の受託研究「南阿波パークウエイ関連施設基本計画」の立案に参画しました。これが具体的な観光地域づくりの最初の出合いです。

この事業は(社)日本観光協会(以下、日観協と略記)から武基雄都市計画研究室が受託したもので、徳島県の日和佐・牟岐間に観光有料道路を建設するための需要予測、路線決定から沿線における拠点施設の計画立案を行うものでした。当時の窓口が奈良繁雄さん(後の日本観光協会常務理事、城西国際大学経営情報学部教授)で、私はこの時初めて奈良さんにお会いしました。

計画の基本方針、自動車観光交通量の予測、景観分析による路線決めや全体計画案は研究室の先輩が分担しました。少し前にケビン・リンチの景観論などが出てき

ていたので道路からの景観分析が導入されました。観光レクリエーション施設計画は私を含めて数人で分担しました。私の担当は明丸地区での海水浴場、野営場を含む宿泊研修施設の計画でした。規模を想定し模型を作って施設構想を提案しました。その後、この有料道路は実現し沿線施設の一部も武研担当等で実施されました。



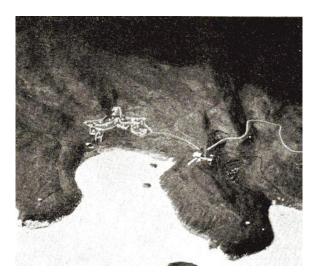


写真3「南阿波パークウエイ関連施設基本計画」計画図と模型(明丸地区) 資料:阿比留勝利氏提供

翌年の 1968 (昭和 43) 年度にも武研究室は日観協から徳島県阿南市の「橘湾及び関連地域観光開発計画」を受託し、私は展望施設の計画を担当しました。 私の観光との出合いは観光レクリエーション施設計画からでした。

●八代市観光開発計画に参画して得た出会いが「最大の宝」に

その後、研究室の先輩を介して日観協で行う熊本県八代市観光開発計画の策定プロジェクトへの参画の打診がありました。私はそれまで少し観光施設計画に関わっていただけで計画調査全体の段取りや部門別の対応策などは不勉強でしたので、参加させてもらうことにしました。

メンバーは日観協の奈良繁雄さん、東大大学院生の前田豪さん(現リージョナル・プランニング代表)、同じく東大大学院生の渡辺貴介さん(後の東京工業大学教授)です。奈良さんとは挨拶程度にご面識はありましたが、前田さん、渡辺さんとはこの時が初対面です。作業は奈良さんを司令塔に、前田さんが全体作業を主導、渡辺さんが需要予測、私は現況分析を担当させていただき、この時観光計画調査の進め方など多くを学びました。

以後、この三氏との出会いは、観光の研究や仕事をする上で最大の宝となりましたね。残念ながら奈良さん、渡辺さんは逝かれましたが、前田さんからは折々の交

遊の中で多くを学んでいます。

●大学院在籍中に(株)日本計画技術集団の設立に参加

当時、わが国は高度経済成長の絶頂期で、新全総、大阪万国博覧会の開催など将来社会の可能性を感じさせる動きが横溢していました。その中で 1970 (昭和 45) 年に研究室の先輩から株式会社日本計画技術集団 (略称ジュピオ、代表取締役伊久見嘉男、副代表倉本旭博、都市計画役員竹内泰夫さんなど) への参加の打診を受けました。私も大学院に在籍しながら出資して参加しました。

ジュピオは衣食住生活関連産業及び環境開発の総合シンクタンクとして、研究から事業開発までを実践する意図で設立された会社でした。衣食住関連産業を手足として収益を上げ、R&D機能(頭脳集団)を併せ持つ組織づくりを目指す実に面白いものでした。

事実、気鋭の専門家をそれぞれの部門のヘッドに配し、「衣」では服飾デザイン、 ブティック経営とファッションR&D誌(情報誌)の発行を、「食」では手始めに 喫茶店経営を、また「住」では那須高原でのプレハブ開発を試みました。また多様 な人材交流のためのメンバーズクラブも具体化しました。

場所は千駄ヶ谷駅前を皮切りに、原宿の明治通りと表参道の角のオリンピアアネックス。その一番上階が計画・研究部門、地下はブティック、喫茶店と画廊を開設。また研究・計画部門では、国・地方自治体との関係の密な公益法人などと連携して、水資源開発、工業開発、観光開発などの計画研究及び事業化を主な仕事としました。

私は主任研究員として、都市・地域計画作業のうち主に観光計画調査を担当しながらダム水没者の生活再建及びダム湖周辺の関連地域開発(観光開発等)にも関わりました。中でも渡良瀬遊水池のレクリエーション利用計画では、この遊水池がかつては足尾銅山の鉱毒事件で廃村になった谷中村跡だっただけに、田中正造翁の渡良瀬川鉱毒事件に対する公害闘争の歴史から地域開発の光と影を深く学びました。このプロジェクトは、以後の私の地域計画を進める基本姿勢に大きく影響したと自覚しています。

ジュピオで身についた衣食住関連事業や観光等地域計画の経験は実に有意義でした。また、この頃仕事を通じて豊川洋さん(後の川村学園女子大学教授)、古賀学さん(現松蔭大学教授)、(社)日本能率協会総合研究所の高地高司所長、花井照平、北矢行男主任研究員(後の多摩大学教授)の方々には自立後も大変お世話になりました。

表 1 阿比留勝利氏の経歴

年	経歴
1967 (昭和 42) 年	早稲田大学第一理工学部建築学科卒業
1973 (昭和 48) 年	同大学院理工学研究科都市計画専修修士課程修了、博士課程単位取得退学
1973 (昭和 48) 年	JAED 日本環境ダイナミックス(東京)、(株)環境計画研究所(福岡)設立
1975 (昭和 50) 年	両社を(株)ジェド・日本環境ダイナミックスに社名変更、代表取締役(~2006 年 7 月)
2001 (平成 13) 年	岐阜県立森林文化アカデミー(前岐阜県立林業短大)兼任講師(~2010 年 3 月)
2005 (平成 17) 年	城西国際大学経営情報学部教授(国内・国際観光まちづくり等担当)
2006 (平成 18) 年	同大学観光学部教授(~2013 年 3 月)
2010 (平成 22) 年	青森公立大学兼任講師(~2011 年 3 月)
2013 (平成 25) 年	城西国際大学観光学部客員教授、同大学院国際アドミニストレーション研究科教授(~現在)

資料:阿比留勝利氏提供資料より作成

表2 参画プロジェクト 別紙を参照(最終ページに収録)

表3 学会・社会活動 別紙を参照(最終ページに収録)

表 4 論文等

年度	題名	出典
1971(昭和 46)年度	レクリエーションナルアイデンツシステムの提案論文(共著)	(社)日本観光協会・月刊「観光」
1976(昭和51)年度	「観光行動と情報」	(社)日本観光協会・月刊「観光」
1978(昭和 53)年度	「低利用地域の観光利用促進について」	(社)日本観光協会・月刊「観光」
1979(昭和 54)年度	「過疎地におけるリゾート開発のあり方」	綜合ユニコム(株)・「レジャー産業」
1980(昭和 55)年度	「従来の観光開発にみる地域社会への融合度と今後の展開」	綜合ユニコム(株)・「レジャー産業」
1981(昭和 56)年度	「離島観光の現状と課題」	(社)日本観光協会・月刊「観光」
1982(昭和 57)年度	「温泉地・リゾート再開発資料集	総合ユニコム(株)
	「温泉地・リゾートの基本機能と再開発の捉え方」」	
1983 (昭和 58) 年度	「地域振興におけるリゾート開発の役割再考」	綜合ユニコム(株)・「レジャー産業」
1983 (昭和 58) 年度	「ダム周辺観光開発と過疎地振興」	月刊「ダム日本」
1984(昭和 59)年度	「混住地域の実態と地域形成」(分担執筆)	(財)地方行政システム研究所
1984(昭和 59)年度	「都市文化の保全と創造」(分担執筆)	(財)地方行政システム研究所
1985(昭和 60)年度	「地方中核都市の形成方策(佐賀県)」(分担執筆)	(財)地方行政システム研究所
1985(昭和 60)年度	「観光開発」と「観光地づくり」	(社)日本観光協会・月刊「観光」
1985(昭和 60)年度	「第3セクター方式再考ーその推移と課題ー」	綜合ユニコム(株)・「レジャー産業」
1985(昭和 60)年度	「機能論からみた大規模リゾート開発のあり方」	綜合ユニコム(株)・「レジャー産業」
1985(昭和 60)年度	「離島性の再評価と役場職員への期待」	「しま」(財)日本離島センター
1986(昭和 61)年度	「観光需要の成熟化と行政対応の視点」	(社)日本観光協会・月刊「観光」
1986(昭和61)年度	「経済構造の変化とリゾート開発」	綜合ユニコム(株)・「レジャー産業」
1986(昭和61)年度	「リゾート地における都市的アメニティの演出」	綜合ユニコム(株)・「レジャー産業」
1986(昭和 61)年度	「地域環境づくりと文化行政」	(財)地方行政システム研究所
1986(昭和 61)年度	「観光行政の新地平を拓く」	地方自治職員研修
1987(昭和 62)年度	「リゾートすることが 21 世紀を拓く」	神奈川県月刊「かながわ」
1987(昭和 62)年度	「日本型バカンスの展望とリゾート開発の視点」	「地方自治職員研修」1988.1

1987(昭和 62)年度	「既成観光地の活性化における行政対応の方向」	綜合ユニコム(株)・「レジャー産業」
1989(平成元)年度	「イベントと地域振興」	(財)日本立地センター
1990(平成2)年度	「京都への提言」(寄稿)	(株) CDI
1991(平成3)年度	「国境の島対馬の地域開発」	北東公庫・機関誌「ほくとう」
1992(平成4)年度	「離島コミュニティの活性化を考える」	(財)日本離島センター「しま」
1992(平成4)年度	「文化再考」(寄稿)	(株) CDI
1993(平成5)年度	"地域の光を観(示す)"観光の再認識(自治時報)	(財) 地方行政システム研究所
1993(平成5)年度	「時代の気分」(寄稿)	(株) CDI
1995(平成7)年度	「21 世紀を展望した離島振興の視点	(財)地方行政システム研究所
	一交流と来住の促進による"固有文化の島"づくり一を考える」	
1995(平成7)年度	「阪神大震災への提言」(寄稿)	(株) CDI
1997(平成9)年度	「農業と観光の複合的展開による地域づくり」(新潟県黒川村)	(財)地方自治研究機構
		「地方自治研究」論文
1997(平成9)年度	「農漁村ツーリズムの可能性」	(財)運輸調査局
1998(平成 10)年度	「島の振興」(取材・寄稿)	(株)対馬新聞社
1999(平成 11)年度	「都市観光で活性化する城の文化中核市熊本の取り組み」	(財) 地方自治研機構・地方自治研究
1999(平成 11)年度	「長崎雑感」(寄稿)	長崎県人会誌
2000(平成 12)年度	「観光地の通年化を考える」	(社)日本観光協会・月刊「観光」
2000(平成 12)年度	「ツーリズムの流れを読む」	(財)地方自治研究機構
2001 (平成 13) 年度	「観光アドバイス地域からみる田舎の観光 の課題」	(社)日本観光協会 ・月刊「観光」
2002(平成 14)年度	「農村観光と地域の光」	中国電力経済研究センター
2003(平成 15)年度	「求められる地域性と国際性が融合する観光まちづくり」	(財) ほくとう総研
2003(平成 15)年度	「外国人観光客受入による観光地活性化の視点」	ツーリズム研究会
2006(平成 18)年度	「地域資源の再発見とこれからの観光まちづくりの視点」	城西国際大学紀要(観光学部)
2008(平成 20)年度	「ウェルネスとウェルネスツーリズム	城西国際大学紀要(観光学部)
	~その位置づけ、概念と展開の視点~」	
2009(平成 21)年度	「まちづくりからの観光振興	城西国際大学紀要(観光学部)
	参画と協働によるコミュニティの文化開発からの接近」	
2011(平成 23)年度	「"我が島学運動"から固有文化の島づくりを目指せ	(公財)日本離島センター「しま」
	一海洋立国日本を支える離島─」	
2011 (平成 23) 年度	「離島振興総論-これからの離島振興を考える一」	人間環境論集(法政大学人間環境学会
2014(平成 26)年度	「離島振興の変質	(財)日本地域開発センター
	~本土・都市域等と多元的対流による振興の視点~」	
2015(平成 27)年度	「離島振興総論:これからの離島振興を考える」	人間環境論集(法政大学人間環境学会)

資料: 阿比留勝利氏提供資料より作成

表5 著書

投り 有自		
年	経歴	出版社
1982 (昭和 57) 年	リゾート・温泉地のホテル・旅館再開発資料集(共著)	綜合ユニコム(株)
1985 (昭和 60) 年	観光地づくりの道標Ⅱ (地域ぐるみの観光地活性化方策) (共著)	(社)日本観光協会
1989 (平成元) 年	商工観光振興マニュアル(共著)	新潟県商工連合会
1990 (平成 2) -	観光地の活性化方策 I ~Ⅲ (共著)	(社)日本観光協会
1992 (平成 4) 年		
2002 (平成 14) 年度	コミュニティ・マネジメント(共著)	学校法人法音寺学園
2007 (平成 19) 年	観光実務ハンドブック(編・共著)	(株)丸善

資料:阿比留勝利氏提供資料より作成

2.「観光」における取り組み

【観光分野で何をやってきたのか】

●30 歳で観光・地域計画のコンサル会社を設立

ジュピオに3年間在籍した後、1973(昭和48)年3月に退職しました。その後半年ほどは先輩や友だちの仕事を手伝わせてもらい、同年秋に福岡市で友人と(株)環境計画研究所を、東京ではJAED ジェド・日本環境ダイナミックス(以下ジェドと略記)を設立。1975(昭和50)年暮れに統合し、城西国際大学に勤めるまで以後約35年間ジェドの代表取締役として会社経営に従事してきました。

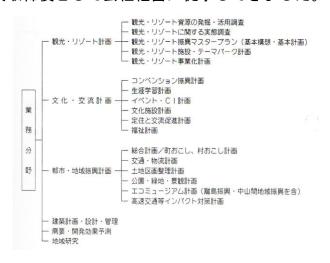


図1 (株)ジェド・日本環境ダイナミックスの業務範囲

資料:阿比留勝利氏提供

仕事の内容は観光分野を中心に、文化、交流、ダム関連地域開発、離島や過疎地振興など都市・地域計画のコンサルタント業務及び建築設計・監理です。今様にいえば観光まちづくりのプランナーの仕事、広くいえばコンサルタント(以下コンサルと略記)業務です。

観光分野で取り組んだ仕事の細目は、(1) 観光調査及び研究、(2) 観光需要の予測、(3) 観光地域全体計画、(4) 特定テーマ別計画及び事業化計画、(5) 建築設計・管理のプロデュース、(6) 講演、委員、大学などでの観光地域づくり教育、(7) 執筆、ですが、中心は(1) ~ (4) です。

具体的にいえは、観光地域振興のコンセプトづくり、計画案づくり及び計画立案のアドバイス、観光需要予測(潜在需要予測、開発効果を読み込んだ予測)、開発整備方式(主体、財源など)、財務シミュレーション、財源調達アドバイス(官民融資・補助制度など)、開発・経営組織づくり、事後評価などになります。

●コンサルの基本スタンスは「黒子的配慮」と「よそ者性」

私は観光コンサルの基本スタンスとして、自身が観光地域づくりを実現するものではなくサポート役だと考えてきました。コンサルの方には観光地域の成果について「私がやりました」という人がいます。その意味は様々です。無論特定の提案が実現の要となったという場合もあるでしょう。しかし、観光地域計画の実現についてコンサルタントが限定なしに「私が」というのは、少し違和感もあります。観光地域づくりでは、地域内外の多様な関係者が時間をかけて実現させていくものが多く、コンサルは主体性、すなわち自身の立ち位置を明確にしたうえで「黒子的配慮」と、安易ななれあいを排除し緊張感を喚起するという意味で「よそ者性」をもつことが肝要だと思います。

もちろん、コンサル側からすると、投入した提案などに手応え、成果が返ってこないという欲求不満も多々あります。また自己PRをしないと仕事をつくりにくいという現実もありますね。しかし、コンサルには地域で実現されたものの中に提案したコンセプトが感じられたらそれでよしとする姿勢も大切な気がします。

●観光地域計画は合意の結晶、推進のポイントは地域の担い手捜し

具体的な取り組み方は、①時間をかけて、②地域で取り組むリーダー(次世代等 予備軍を含む)をはじめ専門スタッフなどになりそうな人を探し、③その人々への 観光まちづくりと当該計画の考え方の伝達、場合によっては伝達するための素地を つくる実践教育(OJT)を行い、④プランを提言すること、と考えて進めました。

計画の実現には、①当該地域の観光まちづくりの考え方を言葉、型、図面、事例・ 共同視察など、いろいろの手段で理解してもらい関係者の心をつかむこと、②計画 実現プロセスでは頻度ある訪問と提言、③生起する多様な地域の意見に対しては真 に底を見極める姿勢でコンセプトを統合する努力、をまずは大切にしました。

観光計画の本質は、計画の実現を前提に、「観光振興の目的に添った多様な主体の合意形成による価値の創出」だと思います。民間企業の事業計画では、その企業目的(収益など)に沿う計画内容を軸に進めればかなり完遂できる面があると思います。しかし観光地域の計画では、多様な地域関連主体の利害を含むニーズ把握、計画効果の共有、推進プロセスにおける関係者の本音に基づく意向調整などを経た事業化が実現のポイントではないでしょうか。

コンサルの役割は合意や個別課題への技術・ノウハウの提供、課題解決を指向する想像力豊かな計画案の提起、検討プロセスにおける合意形成の促進剤的な役割が大きい感じがします。そのためにはコンサルタント自身の姿勢、信頼性の構築と想像力が問われます。単なる技術サービスではなく発見的、価値創造への挑戦をいってもよいかもしれません。反対意見者との胸襟を開いた議論でその真意を明確化して合意につなげること(一種のネゴシエーター的役割)が推進効果をもたらす様に思います。

●観光基本構想への参画から公私合わせて30年以上付き合いが続く熊本市

作業参画、担当を含めて多くの計画に関わってきましたが、思い入れがあり、成果も感じるものの一つが熊本市の取り組みです。それはジュピオに在籍していた1970(昭和45)年、日観協からの委託で行った熊本市初の観光基本構想(マスタープラン)の立案です。

熊本市の観光基本構想の主眼は熊本の観光拠点である熊本城、水前寺にもう1つ 金峰山を拠点化して観光構造を強化することでした。それをうかがい、この計画検 討では、今様にいえば「都市観光」という考えを打ち出しました。これだけの大都 市(県都)の観光では、熊本城や水前寺に金峰山を付加して観光構造を強化するだ けでなく、都市機能や都市環境そのものを魅力化しないといけないと主張しました。 都市観光の魅力とは、都市機能(生活、生産、流通、中枢管理機能等)と都市活動、 及び都市環境総体の魅力であり、端的に生活関連施設、都市内の公園、生産団地、 基盤施設なども観光の対象になり得ると考えていたからです。時代はマス・ツーリ ズムの最中ですし、ましてや観光部門計画ですから市役所内では「概念の幅が広す ぎる」という意見も出て論議がありました。幸い、最終的には「都市は単体資源だ けでなく都市機能・活動全体の魅力が観光対象」という考えで了解されました。そ の後、市の観光課(坂田憲一課長、後の局長)が主導されて 16 部課に及ぶ横断的 な「観光振興会議」を立ち上げられ、アーバンデザインと観光を接合して都市観光 のコア部分である市街地の景観を含む魅力化に取り組まれました。これは後に、サ ンアントニオ市と提携を果たす坪井川リバーウオーク整備にもつながっています。 また、古い地域の歴史性をビジュアル化して城下町の歴史的背景を示す画像付き案 内版(「都市のルーツ案内版」と仮称)などの工夫も進み、都市観光のコンセプト が体現されてきました。後に、食品工業団地を観光と結びつけたフードパル熊本も 整備されました。

熊本とは公私を合わせて 30 年以上のつきあいとなりました。最初の都市観光のコンセプトも現在の「観光コンベンション都市熊本」に引き継がれており、「あの基本構想の考え方があったから、ここまで拡大できました」と市役所の方から言われたことがあります。今年 4 月の熊本地震で市も大きく被災しましたが、旧知からは城の文化都市の再生を期すといった意気盛んなお便りが届いています。

(注) 熊本市の観光基本構想策定の4年後にその施設整備計画が具現化

1974(昭和49)年度に入り、熊本市では先の基本構想に基づき西山(金峰山)地区の施設整備計画の策定が日観協に委託され、その作業を設立したてのジェドで担当させていただきました。日観協では高橋進部長(後の東京農業大学教授)がこの計画を担当されました。

この計画対象地区の金峰山は、雲仙・島原や有明海を眺望できる展望地で、昔は 元服前の男子が必ず登る習慣があり、以後も市民の身近なレクリエーションかつ心 の拠り所となっていました。そこで近郊緑地・金峰山の心と景観のシンボル性を活 かすことを重視し、点在する自然、歴史などの個性的資源を活かして近隣者や市民 の日常的反復利用を支持基盤とし、広域観光レクリエーションの利用に拡大する考えを基本方針としました。

整備のポイントは、風光明媚な肥後耶馬溪周辺、宮本武蔵が晩年五輪書を書いた 雲巌禅寺周辺とアクセス道路、夏目漱石の「草枕」の一節「おいと声をかけたが返 事がない」で知られる峠の茶屋周辺、金峰山頂と山麓を含む観光ルート整備などで す。この施設整備計画に基づき、雲巌禅寺周辺へのアクセス道路の整備は路線を変 更して実現しました。参考事例を提供した肥後耶馬溪への架橋ができ、峠の茶屋の 実施計画案も後に担当させていただき峠の茶屋公園に結晶しました。

この計画が実現したのは、市の公的施設整備事業として推進されたということもありますが、何よりも市初の観光基本構想を軸に地区別計画を策定し、必要なものについてはさらに個々の実施計画という手順を踏んで実現性を吟味しながら推進された行政のぶれない姿勢によるものだと思います。

●地域・ユーザー協働型による過疎地のリゾートコミュニティ形成の実験

実現はしませんでしたが先駆的な取り組みだったと思うのが、1971 (昭和 46) 年度から 2 年間ジュピオが日本農業新聞の委託で行った新潟県松之山町でのリゾートコミュニティ構想の実験です。この構想は、観光レクリエーションユーザー(東京都市圏住民)と過疎地松之山とを直接結んで交流型の振興を目指したものです。

高度成長期の 1960 年代半ばから農山漁村の過疎化が進み 1970 (昭和 45) 年には 過疎地域対策緊急措置法が成立します。その翌年に日本農業新聞からジュピオに 3 か所の過疎地の一つをケーススタディ地区とする観光振興の相談がきました。対象 は長野県美麻村、鬼無里村、新潟県の松之山町でした。

ジュピオの代表が都市・農山漁村交流型の「リゾートコミュニティモデル」を発 案し事業化を実験することになって私も計画・実験等を分担しました。3か所のプレ調査の結果、長野県美麻村、鬼無里村には既に民宿が開業しており松之山町だけがまだ民宿も育っていなかったのでそこをケーススタディ地区に選定しました。

ユーザー側として当時約30万人の居住者を抱える東京の住宅公団自治協をはじめ、江戸川区都市環境会議など都内にあって自然地域への志向性の高い団体や個人の実験への参加を検討しました。役割分担は、ジュピオがモデル計画の立案、地元は松之山農協が滞在型観光を企図した受入態勢づくりとしました。

実験は秋葉原の日本農業新聞の本社前からバスを仕立てて住宅公団自治協の理事等関係者に同乗してもらい、アドバイザーとして日観協の豊川さんにご協力いただきました。現地では3軒の民泊サービスの実験を含めて三日三晩交流プランを呈示して実現性を探りました。翌年には「松之山倶楽部」設立の話まで進んだのですが、地域環境や受入態勢には好感が持てるものの、片道8時間かかるのが難点と指摘され、より手軽にリピートできる場所がベターという声がユーザーサイドから上がりました。結果的に計画は実現しませんでした。しかし、後に民泊を受け入れた民家が松之山初の民宿を経営するなど観光振興の一助にはなったようです。この頃

日本初のふるさと町民制が会津三島町で発足しました。

この取り組みを行っていた 1971 (昭和 46) 年に、長野県木崎湖夏季大学で過疎地振興をテーマに過疎地の全国研修会が行われ、私は講師としてこのモデルを発表しました。このとき過疎地振興を模索していた足助町の小沢庄一さん(後の観光カリスマ、足助町観光協会長)や山形県小国の高橋睦美さんなどとお会いし、この取り組みを評価していただきました。その後、足助町からジュピオに観光のアドバイス依頼がきて同僚の津田宏之さん(後の関東学院大学教授)と出向き、以来ご縁も深まりました。今では農林水産省で「都市・農山漁村の共生対流」が施策化されていて珍しくはないのですが、これは異なる地域環境とそこで育まれた生活文化(異日常性)を介した交流(生活者交流)による振興の方法、計画論的意味で「新しい都 連続体の形成」による地域振興の方法として展開できる発想でした。その意味でも、地域・ユーザー協働型の過疎地振興の実験は有意義な取り組みだったと考えています。

●環境保全をベースに土地利用規制を提案した石垣島観光開発計画

1972(昭和47)年、日観協からジュピオに委託された本土復帰まもない沖縄県石垣島の観光総合開発計画の立案に参画しました。

日観協の奈良さんほか、ジュピオ代表の伊久美さん等5名ほどでチームを組んで 現地に入りました。年長の奈良さんが 40 歳前くらいでしたか。一方、現地関係者 の多くは年配者で、若いチーム構成が少し気になったようでした。

この計画では、まずはマスタープランが求められているため、オーソドックスに 観光立地条件の分析と展望を行い、拠点整備計画、観光ルート計画などを提案しま した。その上で、特に力を入れたのが乱開発防止の土地利用規制です。

当時、尖閣諸島海域での石油埋蔵問題が表に出て沿岸域の平坦地はかなり島外資本に買い占められていました。対応策として、環境に適合した開発誘導が課題となり、結果的に、観光資源の保全と開発、既存の農地法、自然公園法(西表国立公園)などの援用や条例化等で誘導することを前提に、沿岸域に土地利用規制の網をかけた観光振興計画としました。以来、八重山地域とは公私のお付き合いができ、数年前の中型ジェット機就航に際し、(財)地方自治研究機構からの依頼でそのインパクトを受けた観光振興対策、水対策などの調査研究を担当しました。海洋性リゾート、国境離島振興などとの関連でも個人的に往来を続けています。

●低利用観光地域の「小規模性」と「知恵」による振興対策を研究

1977(昭和52)年、日観協の低利用観光地の利用促進対策調査の初年度を担当させていただきました。低成長期に入って低迷する過疎地の低利用な観光地域を利用促進するための調査でした。この調査では資源立地、市場立地の良悪のクロスから、「低利用観光地」を、①資源立地も市場立地も良くない観光地域、②資源立地は良

いが市場立地が良くない観光地域、③資源立地は良くないが市場立地は良い観光地域、の3つに分け、特に②の対象として福島県只見町を、③の対象として長野県浪合村をケーススタディ地域としました。結果、低利用観光地はソフト(知恵)を使って利用を促進すべしという方針を導き、振興事例で利用促進策の大枠をまとめました。

敷衍すれば、低利用観光地を、過疎地域にあって体力(経済力)は小さいが体質(風土文化)は個性的な「小規模観光地」と規定し、その「小規模性」を活かす工夫を進めることを提起したものです。例えば小規模地域では入込観光客の規模ではなく質に留意すること、小規模地域故にその地域インパクトは大きいことなどを指摘しました。これは低成長期に成熟度を増す観光需要に対して知恵(ソフト)を使った観光地域づくりへの転換を示唆する研究になったと考えています。この調査の座長が当時(財)日本交通公社研修部主任の溝尾良隆さん(後の立教大学観光学部長)、委員に東京大学助教授の渡辺貴介さん、東京工業大学助手の永井護さん(後の宇都宮大学教授)、マーケティング専門家の安間一勇さんなどでした。その後、溝尾さんには特に日本観光研究学会、海外リゾート視察でお世話になり、城西国際大学観光学部でもご一緒しました。多くの観光研究者、実践家と出会えたという意味でも意義深い研究でした。

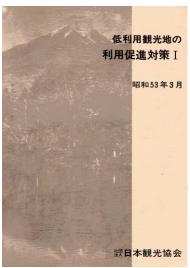


写真4「低利用観光地の利用促進対策 I」報告書表紙

資料:阿比留勝利氏提供

●落人文化をテーマパーク化した「湯西川平家の里事業化計画(略称)」

ジェドで構想から事業化計画を受託して実現し、今でも経営が持続しているという意味で、まあ成功した事例かなと思うのが、1980(昭和55)年度に担当した「湯西川平家の里事業化計画」です。これは湯西川温泉の平家の落人文化と村民のアイデンティティをテーマパーク化したものです。

きっかけは栃木県栗山村からの突然の電話でした。湯西川温泉の活性化計画を委託するコンサルタントを東京で探している、村長が今から立ち寄りたいとのこと。 栗山村との接触は初めてでした。齋藤喜美男村長によると、我が社が2社目の訪問 先だとのことでした。村長は建設会社の社長ご出身で開発や経営管理に詳しい方で した。話を伺うと「湯西川温泉は日光の奥にあって交通条件が悪い秘湯的温泉で、 精力剤のサンショウウオでここ 10 年やってきた。しかしこのままではもたない。 次の 10 年間の活性を維持できる計画が欲しい」とのことでした。

意見交換になって観光ニーズの動向、宿泊定員稼働率の採算水準、宿泊の適正容量、季節変動対策、集落経営に寄与させる開発方式など一通りの話をしました。お話しの中で、湯西川は平家の落人部落という特性をうかがい、平家落人のアイデンティティを魅力化し、集落経営で落人の山里文化を引き出せれば活性化すると直感。茅葺き屋根を基調とする公設民営テーマパーク「平家の里」を提案しました。その後計画策定予算を目の前で見積もると、「ここに決めた」との一声がありました。受託後、現地調査を行い、平家の里のコンセプトを練りあげ、模型を作って施設構成を検討し、配置の適地選定が課題となりました。そこで地形、土地利用や土地規制などから三案の代替案を設定し比較評価で関係者の合意を得ました。こうして平家の里は1982(昭和57)年から4年の工事期間を経て、1985(昭和60)年6月6日にオープンしました。敷地は1.7ha、事業規模は約3億円で、主な財源は国の第三期山村振興対策事業補助金2億円に県単の山振事業補助が投入されました。国の補助を受けるために我が社も何度か同行して財務計画等を説明しました。オープンした初年度の経営収支差を聞くと、事前に行った財務シミュレーションと大きく狂いがなく事業化計画の妥当性が実証されました。

私は当初からこの事業は成功すると考えていました。奥まった場所にある湯西川には自然と集落以外に見学・体験する施設がない。一方平家の落人部落の誇りが生活に息づいているので、「平家の里」というコンセプトは住民と山里文化を求める観光客双方のニーズに合致すると考えました。住民の誇りや心の支えは実現性、持続性につながる重要な要因になると思ったからです。

実施は地元設計事務所が担当。建築と敷地計画は我々の計画に準じたものでしたがデザインや展示の一部に少し違和感をもつものがありました。「計画は東京、実施は地元」のスタイルはやむを得ない面もありますが、「計画コンセプトを実施主体につなぐ仕組み」が手薄でした。

写真5「平家の里」 中庭周辺の様子 (平成8年撮影) 資料:阿比留勝利氏提供



●関連主体参画の計画過程が合意と実践を引き出した「那須町観光振興基本計画」

1982(昭和57)年暮れに、那須町から観光振興基本計画を策定したいとのお話がありました。当時は石油危機以降の低成長の中で、観光地域は低迷を続け、惰性化したキャンペーンとイベントの繰り返しで悶々としていた時期です。

現地に出向き、益子重雄町長、室井平七那須町観光協会長とお会いしました。町長は会社社長のご出身、室井会長は那須温泉・那須観光を主導してこられた重鎮で、 芭蕉が滞在した那須湯本の清水屋のご主人でした。

町の観光審議会で答申された計画案を見せてもらうと、数枚の文章で記述された 方向づけだけでした。「これだけでは町ぐるみで取り組む計画にはならない」ので プロジェクト化した計画立案を、と提言しました。後に、その答申を受けた観光振 興基本計画の策定が決まり、結果的に我が社が担当することになりました。那須町 では初の観光基本計画の策定でコンサルを入れるのも初めてでした。

具体的な計画立案は町と観光審議会(観光業界等)を中心にコンサルが関わり、アドバイザーとして県の観光主管課が参加する方式で進められました。結果、基本計画は 1983 (昭和 58) 年度にできました。類例もつけて、誰がどう関わればいいかというプロジェクトの推進方式案を出したところ、行政も民間も関わり方がある程度わかったということで、計画はかなり実現性を帯びてきました。これまで公共・民間ともに活性化の必要性を認識し、意欲ある民間グループ活動などもありながら、活性化の方針・方策を共有できなかったため具体化しなかった様子がうかがえました。

この基本計画では全体計画とともに、17の主要プロジェクト化によって課題解決を具体化し、合意とある程度の実効性を持たせることができました。

実現した主要プロジェクトの一つを少し説明します。後に「那須高原友愛の森」と呼ばれる施設です。プロジェクトの内容は地場の芦野石産業の観光資源化による産業と観光の活性化を狙ったものです。那須高原の観光流動のコア地区にある町のコミュニティスポーツ施設想定地を使って「ストーンガーデン」として整備する案です。整備手法は芦野石を使った現場制作による国際彫刻シンポジウムを中心とし、施策プロセスの観光資源化と完成後の観光流動とからめて芦野石等地場産業の宣伝PRを促進するといった構想です。これは那須町のプロデュースによって芦野石産業、町内芸術有識者を介した国内彫刻家集団の結集と著名建築家の投入となって彫刻シンポジウムが開催され、併せて関連施設も完成しました。その後道の駅にも登録され、那須高原友愛の森自体がまるごと芦野石の見本施設といってもよいものになっています。

このほか県の既定計画かつ那須町の観光振興の先導的取り組みとして殺生石園 地の整備が進みました。温泉地区でも鹿の湯伝説にちなんで温泉につかる鹿の石像、 公衆トイレのセンスアップ及び県、町による湯本園地の整備が進められその実施の 一部をジェドで担当しました。その後、町営共同利用模範牧場を「体験型観光牧場」 に転換するプロジェクトの事業化計画も担当しました。この考え方は後に総合保養 地域整備法(略称リゾート法)の計画にも取り込まれ、栃木県内で最初の承認にもつながりました。そのほか基本計画と絡めて民間主導で実現したのが地元出身の有名な民芸作家故五十嵐豊氏作品の展示施設「ギャラリー駒」、那須湯本温泉街の町並景観整備の誘導を企図した清水屋(先述室井会長の旅館)の先導的修景整備、湯本観光案内センター・観光協会事務所の再整備など、ソフト面でも、若手による九尾太鼓が創設されました。

低成長時代の終息期でもあり、この計画が水面下の潜在意欲を顕在化した面があったのかもしれません。しかし、多くの計画事業が推進された直接の要因は、民間企業の社長ご出身であった益子町長と室井会長という官民の先見性あるリーダーの下に、民間事業者の参画、県関係者の側面支援といった数々の連携が進んだからだと思います。計画作業を担当した側からすると、計画のプロセスのアクションプランニングと位置づけた関係者参画が功を奏した面もあったように思います。

その後、平成 2002 (平成 14、15) 年度にもコンペで那須町観光振興基本計画の立案を担当。地域再生とからめて那須高原友愛の森の再整備及び管理運営計画に関わりました。前者では、休日に交通渋滞で慢性化する那須湯本温泉の車乗り入れ緩和のための那須高原友愛の森発のバスシステムの検討、後者では那須高原友愛の森に農産物直売所の複合化と公の施設全体の効率的管理運営方式の検討でした。特に後者については公設民営化を含む管理運営方式を代替案で提言しました。那須町とは1983 年の観光振興基本計画以来 2003 (平成 15) 年まで 20 年間のお付き合いです。

この仕事との関連で、隣接する黒磯市、大田原市の観光振興基本計画等も担当させていただきました。黒磯市では、基本計画のほか「那須の巻き狩り鍋」の事業化、板室温泉の国民宿舎跡地の施設計画が実現に繋がり、新幹線那須黒磯駅の周辺整備などをとおして商店街と観光との連携を含む観光まちづくりにも参画しました。

● 那須高原地区 ● 満本園地 ※温泉で傷をいやす飯(シンポル)。 ● 道の駅・友愛の森 (現在道の駅) ※芦野石ストーンバーク計画。 ・東北縦貫自動車道 ● 東北縦貫自動車道 ● 東北縦貫自動車道 ● 東北縦貫自動車道 ● 東北縦貫自動車道 ● 東北縦貫自動車道 ● 東北縦貫自動車道

B: 第2次那須町観光振興基本計画(交通計画)

図2「第2次那須町観光振興基本計画(交通計画)」(阿比留一部加筆)

資料:阿比留勝利氏提供

●住民参画型で実現した岡山県「むかし下津井廻船問屋計画」

ジェドではできるだけ民間事業者を含む住民参画型の計画づくりを心がけてきました。平家の里、那須町の観光振興基本計画などはその一端です。これまでの官民連携による観光計画では、概して住民・関係者参画がそれほど手厚くされていなかったきらいがあったと思います。しかし、それでは地域としての計画の意義や実行性が担保されにくい面があります。観光施策の推進から事後の観光地経営段階まで活力を再生産させるためには当初から住民・民間関係者の参画がポイントと考えています。

その意味で 1988 (昭和 63) 年から 1994 (平成 6) 年まで、6年かけて岡山県下津井周辺地区の観光による地区活性化のコアを目指した「むかし下津井廻船問屋計画」は、特に住民参画による方法で実現をみた例だと思います。

この計画は、県から「町並み保存地区」に指定された下津井の漁業集落と、金毘羅両参りや北前船十里港として賑わった下津井港に残る約 100 年前のニシン蔵(旧山高)を活かして、下津井地区の街並み環境整備及び観光による活性化を図るのが

目的でした。特にこの事業にはニシン蔵を生かして若者がイベントや交流できる場 をつくりたいという岡山県(長野士郎知事)のご意向もありました。



写真6「むかし下津井廻船問屋」開館時の様子(平成7年5月撮影)

資料:阿比留勝利氏提供

県主導のプロジェクトとして立ち上がり、初年度は日観協経由で全体構想の作業をジェドで担当。2年度目以降は我が社に直接依頼があり、日観協と相談してジェドで作業を担当しました。作業は全体構想に基づく街並み整備の方向と旧山高の整備内容の合意が課題で、代替案による住民との意見交換を積み上げ、結果としてニシン蔵を中心に町並み整備を進める方向づけとなり、ニシン蔵は資料館化が決まりました。6年目に着工・完成した資料館「むかし下津井廻船問屋」は、日本家屋の梁や柱の構造をそのまま内部デザインとして活かし、ニシン蔵は若者の集まれるビアホール・カフェバーのような賑わい空間を演出。横には下津井名物のタコ料理屋を配しました。

この事業で何よりも重視したのは、下津井住民の誇りを大切にし、地区づくりの拠り所とすることでした。そこで集落に継承されてきた"お宝"の発掘・展示を進めました。結果、明治以来の下津井の写真 10 万点をお持ちの住民の方がご寄贈くださった写真を資料館に展示するなど地元の隠れた資源が発掘されました。計画から実施にいたる推進体制は副所長(樋渡牧人)を軸に資料館に精通した建築家の参画を得、展示の実施は(株)丹青社と連携させていただきました。

「資料館の管理運営を住民に」と主張しましたが、残念ながら実現せず倉敷市の管理運営となりました。現在資料館は無料化され住民ボランティアガイドの案内もあります。数年前に訪ねたら年間 10 万人くらいの来訪者があるとのことでした。

●「若狭小浜食芸工房構想」の複合コンセプトが息づく「若狭おばま食文化館」

平成元年度に福井県小浜市の「若狭小浜 21 観光ビジョン」の公募コンペで計画を受託しました。市初の観光ビジョンの作成です。「海のある奈良」といわれ、城下町でもある小浜は海のシルクロードの終点で北前船の十里港でもありました。また東大寺二月堂のお水取りに送る3月2日の神宮寺のお水送り神事はよく知られています。そのほか若狭塗り、若狭めのう、若狭和紙、若狭塗り箸、若狭瓦などの伝統工芸、日本遺産にも認定された鯖街道とかつての御食国にふさわしい海の食材、江戸時代の花街で重伝建地区の三丁町の街並み、八百比丘尼や杉田玄白、梅田雲浜や歌人山川登美子等の事績が残るいぶし銀のような深みのあるまちです。ビジョンはそれらの資源性を主要事業として活かす方向を検討しました。

このビジョンの骨子固めは数年前から住民参画で進められており、ビジョンは市民各界の人々からなる委員会方式で合意されました。その後事業の具体化の中で、伝統工芸産業の観光利用を含む地場産業会館調査、物産館整備による工芸・観光活性化調査(略称、平成8年度)を担当し、結果として御食国の食と工芸を複合した「食芸工房構想」を提案しました。これは当時の湯田辰夫産業部長が長年温めておられた考えも取り込ませていただいたものです。提案はビレッジタイプの複合施設でしたが、2003(平成15)年の若狭路博2003の海会場として建設された御食国若狭おばま食文化館(海の駅)にそのコンセプトが息づいているように思います。

小浜市は「食のまちづくり条例」を基軸に地区レベルでの住民主導によるまちづくり事業(いきいきまちづくり事業)を進めて魅力凝縮都市の形成で成果を出しています。私はビジョンを担当して 28 年、御食国大使として地道な積み上げと成果を確認してきました。また、ご縁があってお水送り神事の場である鵜の瀬の環境整備計画も担当させていただきました。

●「日本 1/0 村おこし運動」を観光につなげる「智頭町交流観光基本調査」

鳥取県智頭町は岡山県境にある千代川の水源地域の町です。智頭杉で有名な林業の町で調査当時人口9千人弱の過疎地でした。町の林業が外材などに押されて衰退する中で、「日本 1/0 村おこし運動」(「ゼロイチ運動」と略)は、郵便局長の寺谷篤さん、製材所経営者の板橋登志行さんの2人がリーダーシップをとって起こした自力更生の集落おこし運動です。ゼロイチとは無(0)から有(1)を産み出す運動の意味で、集落が一つの誇り(宝)づくりを行う運動です。運動は前段として 10年以上「智頭町活性化プロジェクト集団」を立ち上げて展開されました。それが功を奏して町内の集落おこし運動に進展し、後の1997(平成9)年に行政が自主性を損なわない範囲で支援する制度を創設しました。

この集落・地区おこしを軸とする「ゼロイチ運動」を広い意味での観光に結びつけたいという話を、当時智頭町長補佐官の河原利和さん(現島根県中山間地域研究センター職員)からうかがいました。そこで相談して固めたのが当時まだ少なかっ

た「交流観光」というコンセプトです。「地域個性(生活文化)を介した交流による振興から広く観光にも繋げる」という考え方、すなわち集落や地区とがお宝を介して域外との交流を促進し、熟度が上がれば都市域等との対流型の広域観光として幅と厚みをもたせていく考え方です。

町内では日本初の集落NPOを立ち上げた智頭町新田集落が特産の米を介して大阪いずみ生協と連携、その関連で夏には一泊二日で小中学生のファームステイ、さらに新田の人形浄瑠璃芝居などを訪ねる交流型の観光にも展開しています。これは一例で各集落でいろいろの取り組みがあります。これらのソフト振興を地区レベルで支えるのが町のゼロイチの支援制度です。その後、ハード整備の補助事業「田園空間博物館整備事業」が導入されて交流基盤も徐々に整備され、それを活かす住民・コミュニティビジネスの育成で盛り上がりました。この時、私は事業のスーパーバイザー、一部観光情報施設を担当しました。また 2002 (平成 14) 年度には、国土交通省・日観協と板井原伝建地区と智頭駅を結ぶ乗合タクシーの実証実験に参画しました。これらは交流観光の主旨を堅持し、寺谷誠一郎町長(後の観光カリスマ)を中心にまちぐるみで取り組まれました。

先日久々に智頭町に行ってみました。高速道の延伸等で観光面では少し元気が萎えている感じをうけましたがゼロイチ運動は健在とうかがいました。

近年、地域の人口減少・高齢化が特に問題視されていますが、住民が基盤にならないと地域魅力の基礎はつくれません。そのことも含めて、基本論ですが、「住んでよし」をベースに「訪れてよし」の構造をつくる基盤から観光まちづくりの展開がうかがえる好例と考えています。最近天然酵母のパン、自家製ビール屋タルマーリーの移転・事業化などでも智頭町は知られていますが、自立性ある地域には自立する人々が集まるということかもしれません。

●館山市の赤山地下壕等戦争遺跡が平和学習拠点として利用へ

2003 (平成 15) 年度、自治省の外郭団体(財)地方自治研究機構と館山市による、 戦争遺跡を再発見して地域振興を考える共同計画研究「平和学習拠点計画」の作業 を担当しました。

館山市には館山海軍航空隊跡、州ノ崎海軍航空隊群遺跡、東京湾要塞群遺跡、館山海軍砲術学校軍遺跡があります。その中で市が管理している赤山地下壕が、無断で見学に利用されて安全管理などが課題となっていました。そのため、赤山地下壕の測量と安全性の確認などを含め、戦争遺跡を再発見して地域振興に寄与させる計画の研究を進めました。防衛研究所をはじめ文化財関係の専門家、赤山地下壕の研究家などを結集した委員会での叩き台づくりが主な作業でした。民有地に遺跡が分布し周辺に関係者が住んでおられて太平洋戦争はまだ完全に過去の歴史にはなっていないので扱い方が難しい作業でした。検討の結果、戦争遺跡を地域内外の平和学習の場として整備・供用することで合意されました。そこで防災等の専門企業である大成基礎設計のご協力を得て測量と安全チェックを行いました。後に市が本格

的な安全対策を進めて現在供用されています。

調査を実践的にサポートしてくださった赤山地下壕の研究者で当時高校教諭だった愛沢伸雄先生は、その後安房地域の文化遺産や学習旅行の振興などを進める NPO 法人安房文化遺産フォーラムの代表に就任され、平和学習に取り組まれておられます。昨今はディズニーランドと絡めた修学旅行が訪れるなど、平和学習旅行も進展しているようです。戦争遺跡の中核を占める赤山地下壕が平和学習観光というコンセプトで可能となったという意味では実効性のある計画研究でした。私は大学で安房地域のダークツーリズム研究の素材として折々紹介しております。

●大学等で観光地域づくりを教える

ジュピオ、ジェドのコンサル時代も含めて大学で観光地域づくりに関連する教育にも係わってきました。

ジュピオ時代の大学院在学中の 1970 (昭和 45) 年4月には、研究室の大先輩である藤井博巳さん(後の芝浦工業大学建築工学科教授)から芝浦工業大学建築工学科の兼任講師の声をかけていただき、以後 16 年間建築図学・設計製図・地域計画等の卒業論文を担当させていただきました。特に卒業論文では、観光とのクロスを入れた農村計画、離島振興計画、都市廃棄物問題ほか八幡平国立公園の土地保全分級と観光利用、対馬の石屋根集落の保全と観光活用などを指導しました。

その後、平成 13 年に前田博さん(現京都造形芸術大学教授)からのお誘いで、 岐阜県立森林文化アカデミー(旧県立林業短大)の非常勤講師として、観光地域計 画の実務を含む実践計画ゼミを 10 年間ご一緒させていただきました。大卒後に専 門性を高めるために入学した諸氏等受講生は多彩で、卒業後は地域で観光やコミュ ニティビジネスを起業化した方もいます。こちらも大いに学びました。

2004(平成 16)年後期に、日観協を辞されて後城西国際大学経営情報学部教授に就任しておられた奈良さんの補講をお手伝いしたのがご縁で大学から教員にとの打診がありました。観光学部を創設するということでしたのでお受けし、翌年から経営情報学部教授として観光を担当し、観光学部設立に伴って異動しました。現在は観光学部の客員教授、大学院国際アドミニストレーション研究科教授として観光まちづくり、観光地域経営等の講義を担当しています。

この間、2010(平成22)年4月から一年間、旧知の佐々木俊介さん(青森公立大学教授)からお声をかけていただき非常勤講師として観光を講義させていただきました。下北半島の地域開発、三沢市などの観光振興計画等にも参画してきましたのでありがたい機会でした。学生諸氏等にお役に立てた面があれば幸いだったと考えています。

【観光分野での業績、そして自慢できる功績は何か】

大学院、ジュピオ、その後 30 数年のジェド時代、そして大学教員として多くの観光地域づくりに係わりました。主なもののいくつかは先に概説したとおりです。 自慢の出来る功績はありませんが、観光政策面で関わった次の 2 つは制度化・ルール化されました。新しい分野に携わったという意味で挙げておきます。

① 総理府観光政策審議会専門委員としての制度づくり(「国際観光モデル地区」)

観光政策審議会(以下「観政審」と略)で「国際観光モデル地区」検討の専門委員を1984(昭和59)年から5年間務めました。「観政審」が運輸省に移管される直前の時期です。ワーキンググループは運輸省、座長は日観協の津上毅一副会長が担当されました。渡辺貴介さんも委員でした。そこでは一部お手伝いもし、「外国人も一人歩きでき、自在な交流もできる観光地づくり」を提案しました。その後、ジェドでは栃木県からの依頼で日光・宇都宮地区、日観協からの依頼で広島・宮島、松江・出雲の3地区の実施計画作業を担当しました。

日光・宇都宮地区では英語、韓国語、中国語のアンケートを実施し、i 案内所と 準 i 案内所の整備、案内版や案内標識の外国語併記、和洋トイレのミックスや維持 管理、宿泊施設のプライバシー確保)、医療機関での外国語対応の問診票の整備な どモデル地区の主旨である受入態勢の整備を軸に観光魅力の向上策も検討しまし た。その後5年間実施計画の進行管理委員会にも参画しました。

このモデル地区は受入体制の整備が中心でしたが、最近の多国籍客の来訪増大に伴う情報提供の多言語化や異文化対応 (ハラール対応等)、スマホ普及に伴う WiFi機能の整備、クレジットカードの多様化などは当時と少し様相を異にする面はあります。しかし、受入態勢の基本方針は大きく変わらない。それを考えますと、モデル地区を指定した頃から 30 年近く経ったにもかかわらず受入態勢を巡る国際化の内実はそれほど進んでいなかった様子もうかがえます。

納得はしてはいませんが、来客が少ないと先行して受入態勢を整備することに力が入らないものか、と改めて感じています。



写真7「日光・宇都宮国際観光モデル地区整備実施計画」報告書表紙 資料:阿比留勝利氏提供

② わが国における「スカイスポーツ」振興のルールづくりへの参画

1989 (平成元) 年から 4 年間 (財) 運輸経済研究センター・運輸省に協力して、ジェドとしてスカイスポーツ調査に参加しました。当時はまだスカイスポーツにルールができていない状況で実態が先走っており、安全対策も追いついていない状況でした。まず実態を把握し、ルール作りと地域整備研究のお手伝いをしました。



写真8「スカイスポーツのすべて」報告書表紙

資料:阿比留勝利氏提供

3 「観光」に対する失敗と反省

【わが国の観光の何が問題か】

●「住んでよし」の理念が、観光計画にはまだあまり組み込まれていない。

成熟度を増す内外の観光需要に対応する観光地域づくりには、「非日常性」ならぬ、「異日常性」を介した「生活者交流」という視点を入れた対応を具体化することが必要だと考えています。つまり、異なる地域に住み、異なる生活文化(異日常性)をもつ人々が、その異質性の魅力を相互に訪ね・交流して楽しむことを軸にするということです。そうすれば「まちづくり」が地域の個性(地域文化=生活文化)を育み、地域らしさとして発信力を高め、観光交流につながります。

過去にまちづくりやコミュニティ文化を基底に据えた「まちづくり観光」(今は「観光まちづくり」)というコンセプトがだされたことがあります。これは「住んでよく、訪れてよいまちづくり」が観光地域づくりの基本理念であることを提起したもので、40年程前に四国大洲市での地域主義の研究者や住民との実践の中から産み出されたものです。観光立国推進基本法の理念の解説によく援用されますが、それならば地域主義にたったまちづくりの基本姿勢をもっと大切にして観光振興に組み入れるべきでしょう。しかし、未だにそういう取組が実質化されているところは多く見られないように思います。「住んでよし」の部分がどうもお題目にとどまっている感じがする。これを実質化して観光分野と接合するには「まちづくりに観光性を投入」し、そのまちづくりを根底に据えた観光交流との重層的な合わせ技で進める必要があるように思います。

観光圏整備を見ても、コミュニティや住民サイドを観光・交流に結びつけていく 視点はあるが依然としていわゆる観光分野を中心に生活分野の表層をなめるだけ ですね。生活分野に深入りできていない。これは集落・地区計画、いわばコミュニ ティからの観光まちづくりが弱いことに起因するのではないか。改めて、観光需要 の国際化・成熟化の中で、「豊かで潤いのある地域生活なくして地域観光は成立し ない」という認識を共有する必要があると思います。住民が交流による地域文化の 受発信を求め、地域外の人々がその魅力を感知して来訪し交流するニーズが高まっ ている。観光資源とは生活資源であり、人の生活活動とその所産のすべてが魅力と なり得ることを住民等関係者が広く再確認する必要があると思います。地域文化 (生活文化)はそこの風土と生活から育まれるという意味で個性的でこれからそれ がより観光対象たり得るからです。観光ニーズは「図」(突出した観光対象)から 「地」(地域生活や基盤環境)へと広がりと深味を増していること、生活者も発信 と交流を求めていることを認識し、それらをうまく接合する仕組みをつくることが 課題ではないでしょうか。

敷衍すれば、観光サイドからの問題以上に「地域の光を観(しめ)す」コミュニティづくりのあり方を再考する必要があるように思います。その一つはかつての公

民館運動による自立自助のまちづくりが範となるように思います。例えば、観光案内人を郷土資料館、地区公民館が地域キュレーターとして育成するといったまちづくりと観光地域づくりを連携、重層化させる取り組みなども端緒を拓くのに有効ではないかと思います。

●観光行政の役割の縮小に象徴される観光のコーディネート機能の弱体化

観光は地域の自然、産業、文化、生活のすべてを対象とする交流文化であり、その産業的側面は地域文化産業(JTB提唱の交流文化産業)だと思います。

観光地経営を行政分野でみると、観光行政の守備範囲は狭くなり宣伝PR・情報提供などソフトの特定機能に限定されてきている気がします。一方、観光以外の行政部門では観光との連携施策が増大している感じを受けます。他分野と観光分野がつながることは良いとしても観光が地域づくりにおける他部門の複合戦略分野でかつ「地域づくりの総仕上げ」であるならば、他部門に観光性を投入し、それらを横断的にマネージる観光行政の位置づけと役割を担保できる仕組みが欲しいですね。地方公共団体でいえば、観光行政を企画調整等総合行政部門として位置づけるか、先の熊本市の例のように観光以外の行政部門に観光性を投入して計画調整できる役割をもたせられればよいと思います。

大きなところでは観光庁が国交省の中にあるという意味での限界性もうかがえます。次のステップでは、観光の総合性を発揮できる計画調整力ある独立省化を期待したいところです。

以上は行政分野を軸にお話ししましたが、裏を返せば、官民併せて考えると、観光交流を戦略とする地域ぐるみの観光地マネージ機能の社会化(例えばDMO)の期待につながります。今、地域の自然、産業、文化(生活を含む)と観光交流から複合化する新たな組織形成が求められていると言えそうです。

●観光の社会効果に対する認識が低い

国際観光分野でいえば、観光は「平和へのパスポート」「見えざる貿易」と言われますね。見えざる貿易の部分は経済効果なので力が入りますが、平和へのパスポートという、異文化の相互理解、友好親善といった社会効果についての認識は高くない感じを受けます。

国内観光も含めて敷衍すれば、経済効果はもちろん大変重要で産業的側面でその確立は不可欠です。しかし、「観光=産業」的側面だけでは捉えきれない。国の内外を問わず、異なる地域文化(生活文化)の刺激の授受は観光交流の大切な部分です。まして人口減少社会化、過疎化の進むわが国の地方圏の振興を考えると、国内外の一人の若者の来訪でも100人の集落は元気がでる。域学連携、少し主旨は違うが地域おこし協力隊は一面でそれを物語っている。まさにカルチャーショックの重要性です。元気が出れば知恵が育まれ、金を儲ける動きにもつながります。この社

会効果からの展開の回路もないがしろにしてはいけない。目先の経済効果だけで金、金、金に流されないためには文化交流や社会効果の波及にもっと目を向ける必要がありそうです。

既に外国人観光旅客の"爆買い(モノ観光)"の次のステップは"コト観光"といわれますが、経済事情や観光キャリアが向上すれば当然観光形態は変化するもので、大切ですが、まことしやかに語るほどのものとは思えません。

【わが国の観光政策は有効に機能してきたか】

戦後の観光政策も、戦前同様に戦災復興のための外貨獲得が重視され、併せて温泉法、旅館業法、国際観光ホテル整備法等個別法の制定と国際観光文化都市建設法等などが推進されてきました。そして東京オリンピックを目前に観光基本法が制定されました。基本法の制定は早かったのですが各論が弱く、他の分野との関係性は余り議論されていないと言われています。観光は後発政策的で、その総合性に反して縦割領域に甘んじてきた感じです。

高度成長期の国民観光需要の伸びを予測して大規模レク開発などが各省主導で推進されましたが発生需要を喚起する可処分所得の増加、休暇制度の改変や需要見通しも甘かった。石油危機で頓挫しなくてもそれらの実現が担保できたかどうかは疑わしい。その意味で観光政策は模索段階だったと思います。ただ、この時期は観光地の受入基盤や観光施設等の量的不足に対して「施設づくり」政策が中心でした。自然破壊やゴミ問題等の紆余曲折はあったにせよ、ソーシャルツーリズム的な性格を持つ国民宿舎、家族旅行村などの面ではそれなりに政策は有効に機能したのではないかと思います。

バブル時代の政策は総合保養地域整備法、国際観光モデル地区、テンミリオン計画などに代表されますが、テンミリオン計画は政策面で有効であったと思います。しかし、プラザ合意を背景とした内需振興策として出てきたリゾート法は観光需要の見通しの弱い中で「ものづくり投資」に狂奔した。これはうまくゆくはずがないことを分かっていながら土建業的ものづくりに走った観がある。高度成長期と位相は違うが又かという感じでした。失敗ですね。

その後のところでは、グリーン・ツーリズム、エコツーリズムなどの政策が導入・展開され、併せて今日につながるインバウンド政策も台頭する。前者はバブル崩壊と持続可能な開発などの流れに対応し、後者は脱工業化、人口減少社会とグローバル化の中での国の活力再生産の面で当然の政策選択だったように思います。

その流れから観光立国推進基本法が制定された。その展開として特にインバウンド需要の喚起、端的にアジア圏の旅行者に対するビザ発給要件の緩和、受入態勢整備の面では、観光圏整備法による着地主導性の担保、そのための観光地経営システムとして日本版 D M O の育成などが進められている。これらの総合的政策評価はまだ出来ないが、2016 年 10 月末時点でインバウンド旅行者 2000 万人を突破し政策も国際観光に一段と拍車がかかっている。その面での政策は有効性をもっていると思います。

しかし、年間の国内における観光消費額では国民観光のウエイトが断然高いのも事実です。人口1億人を超す国内観光需要の更なる誘発や観光地域の魅力化施策をもっと重視すべきだと思います。そのためには、観光圏整備などで「住んでよし」の部分が弱い。観光プロジェクトにまちづくり分野を同席させる程度の参画ではなく、コミュニティやまちづくり自体に個性化、発信力の担保と交流展開を高めるためのテコ入れをし、双方を連動させる推進の仕組みを骨太に工夫する必要があるでしょう。DMOの実質化も問われます。

【観光分野で何を失敗し、何を反省しているか】

●計画期間における施策実現の時間的な読みが弱かった

観光計画には計画基準年と目標年次があり、この期間で目標を達成するといった推進プログラムをつくります。計量予測をし定性的判断を含めて前後の誤差を配慮し「このくらいの期間でいけそうだ」と思っても、計画通りにはいかないことが少なくないですね。計画目標期間で対応すべき内容が半歩ではなく数歩先まで行き過ぎてしまう傾向が私にはありました。現実は計画が遅れ気味に推移し、目標年次を過ぎてから実現環境が整う場合が少なくありませんでした。以前は 10 年でできるかと思ったら 20 年後くらいに芽が出てくることもあって計画家としてはダメだなと・・・(笑)。

近年は、歳を重ねたので担当した計画の事後評価サンプルも増えてきたせいか、計画期間、地域社会の変化の読み、計画内容の実現の適合度が少しはよくなったようには思いますが、ともあれ計画の実現スピードの読みについては大いに反省しています。

●「計画づくりは外部委託、実施は地元」の中で計画コンセプトを繋ぐことに失敗

担当したいくつかの事業で計画コンセプトや内容を地元の実施事業者に繋ぐことができなかったことですね。往々にして「計画づくりは外部」、「実施は地元事業者」といった流れが少なくない。多様な関係者が絡んで進められるので、計画づくりの意図が実施事業者に緻密に伝わり実現されるのは難しい面がある。私の場合、計画コンセプトを理解して、実施主体に落とす調整の仕組みをつくる努力をすべきだったにも拘わらず政治的な動きも絡んでそれが出来なかったものがいくつかあります。今考えれば駆け出しの頃で、経験や老獪な知恵がなかったこと、何よりも勇気がなかったことが悔やまれます。対応の姿勢が甘かったことを反省しています。

4.「観光」の計画とその実現

【実現した観光計画と実現した要因】

観光計画といっても「観光地域計画(全体)」「観光施設計画」「観光ソフト計画」 (組織・仕組みづくり、イベント等)」によって実現の捉え方が異なる感じですし、 実現の認識にも曖昧な点があります。

観光地域計画全体の実現は難しいが、その一部が実現するものを含めばまあ実現 したと思われるものもあります。

私が係わった主要なもののいくつかは先にお話しした通りです。かいつまみますと、観光地域計画では那須町の観光振興基本計画は比較的実現したものです。施設計画では、熊本市の西山地区や下津井の施設計画などが挙げられます。

財政資金が潤沢だった高度経済成長期やまだ少しは余力があったバブル期の前までは、観光施設の不足に対して官の主導性や支援で実現性が担保できる面がありました。しかしバブル期は民活によるあだ花の時代でしたし、崩壊後は財政支援が難しくなるとともに、ニーズの成熟化、国際化、民間や地域関係者の問題意識の高まりなどもあって、地域関係者の参画と理解がないと実現性を担保するのが容易でなくなった感じです。

私が関わった低成長期末以降の那須などの実現要因は、民間活力をひきだす行政のプロデュース能力やリーダーシップが大きかったと思います。自賛になりますが、コンサルとして観光計画の真意を汲み、計画検討段階で業界等のニーズに即してプロジェクト化をはかるとともに、それに関して民の参画をひきだす検討方式をとったことも実現につながった遠因かとは思います。

【(一般的に)「観光計画」はなぜ実現しないか】

観光計画が一般的に実現しないという認識は私には必ずしもないのですが、観光 地域計画の全体についての実現は容易ではないと感じます。

その理由は、ざっくりいえば、観光の理解の問題を背景に、計画立案プロセスを 含めて関係者に計画の意義と成果が共有されていない、さらに推進方式の研究が十 分ではないなどが挙げられると思います。実現する気がない計画は論外です。

繰り返しになりますが、計画の本質は「観光振興目的にそった多様な主体の合意 形成」だと思います。観光計画が実現しない場合の要因はいろいろあると思います。 実現に係わるものとして計画立案・推進上では、①地域全体に必要性の認識が弱い、 ②将来の事業推進主体となる関係者の導入が弱い、③計画立案方式が参画型になっ ていない、④行政にトータルプロデューサーとしての自覚と先導性が弱い、⑤官民 合わせた観光地経営の体制が脆弱、⑥必要な専門人材配備や育成が手薄、といった 要因などがあるのではないでしょうか。

敷衍すれば、うまくいったケースは計画が合意されるに足るものであることを前

提に、関係者にやる気があり、関連する各主体をうまく束ねるリーダーシップを持つ人や組織がある。今様にいえばDMOでしょうか。また別の視点からは、例えば市町村レベルの計画でいえば、推進主体になりそうな民間関係者を導入し、加えてインフラ整備や公的支援等をスムーズ化するための上位計画等の関係者(県、国等)を最初から連携させておくような計画立案組織づくりの工夫なども大切でしょう。そのほか、世代を繋いで推進の核になる担い手、予備軍を地域でどう探し育成するかも非常に大事だと思います。

5. これからの「観光」・「観光地域づくり」・「観光計画」への提言

【これからのわが国の観光・観光地域づくりに必要なことは何か】

仰々しい表現になりますが、まずは観光概念の国民的・国家的共有が必要ではないでしょうか。それが曖昧になっている。そのためには幼少期から観光を郷里(生活地域)のまちづくりに必須なものとして教えることでしょう。言い換えれば、究極は地域の魅力を自覚し、自ら参画し、他人にも伝え、他の地域理解も可能な能力を育むことだと思います。

喫緊としては、異論を恐れずにいえば、【わが国の観光の何が問題か】でもお話しした「異日常性を介した生活者交流」というコンセプトの共有と展開を期待したい。関連して、観光の戦略性を理解した対応を再考することではないでしょうか。私は観光は「縦×横×外の戦略分野」と言ってきました。観光は地域の縦割りを横につなぎ、同時に外につなぐ。観光は外との交流なので中を全体化する力が働く。それが「縦×横」を助長する。そこに組み替えの力が生まれる。近年6次産業化、農商工等連携が論議されますが観光は自然、産業、生活、文化を複合する戦略分野として6次産業化の戦略分野です。このことから既存産業の高度化と観光の連携を徹底してゆくことが必要でしょう。

私は観光地域(まち)づくりは「まちづくりからの観光振興」と「観光からのまちづくり」との立体的な合わせ技だと言ってきました。言葉遣いや概念に異論もあるでしょう。「観光からのまちづくり」というのは「主に観光産業分野から他産業に経済波及を進める方法」です。今も基本で、団体画一観光の時代とは異なりますが、観光ニーズの変化に即して参加・体験などを組み込んだ改良がされています。しかしやはり根底には「まちづくりからの観光」、すなわちコミュニティ(集落・地区)の生活文化の開発から地域の固有性や個性を創出して発信力を高め、生活者交流を喚起し、それを「観光からのまちづくり」に繋ぐことがポイントだと思います。先に述べた鳥取県智頭町の「ゼロイチ運動」や小浜市の食のまちづくり条例に基づいて展開されてきた「いきいきまちづくり事業」はその精神を体現している一端だと思います。

観光とまちづくりを接合するには、新たな観光の価値創造機能、いわばイノベーター、カタライザー機能の社会化がポイントだと思います。今DMOの育成が進められています。これは重要です。しかし、観光を狭く産業領域や地域の上澄みだけで捉えた展開なら、今よりはよくなっても限界があるとうに感じます。

観光地域の活性の持続という意味では、地域人口の世代的バランスの維持、専門人材育成の育成、ポリシーの確立、環境・資源の保全といった長期戦略を布石しつつ短期的なニーズ変動、立地変動などに手を打っていく必要があります。目先の戦術と成果主義だけでは観光の持続的振興は危ぶまれますね。

【よい観光地域とは・どうすれば「よい観光地域」が出来るか】

よい観光地域というのはどういうものか厳密にはわかりませんが、観光者(ゲスト)にとってということでいえば、多彩な演出や魅力要因は人それぞれであるとしても、基本は観光者と異なる日常生活の魅力(異日常性、「ヒト」)にふれられること、その地域の知恵で創られた独特のそこらしい「モノ」「コト」の魅力に触れられる地域がよい地域だと思いますね。繰り返しで恐縮ですが、そのためにはいわゆる観光分野だけではなく、観光以外の産業や人々の日常生活の固有性や地域の環境文化をしっかり引き出して発信することをベースとした地域づくりがないと駄目ですね。その上でそれらの立体的複合化を進めることで地域の光が析出されると考えます。

そのためには、観光地域づくりは詰まるところふるさとづくりであるという意味での観光教育が必要になる。展開すれば、「開かれたふるさとづくり」と「住んでよく訪れてよいまちづくり」の理念を幼児から成人までを含めた生涯教育として展開することだと思います。近年、義務教育レベルを含めて教育と観光の連携が国を挙げて進められています。「地域の光を観(しめ)し、それを観る」という意味での観光の理解を生活レベルからの上向法を踏まえて共有していくことが基本でしょう。よい観光地域づくりの根本はそこにあると思います。

2016 (平成 28) 年 2 月 8 日

公益財団法人日本交通公社会ライブラリーにて

取材者:公益財団法人日本交通公社観光政策研究部 梅川智也、堀木美告

本レポートの引用・転載に関しましては、以下 URL をご確認ください。

http://www.jtb.or.jp/etc

表2 参画プロジェクト

別紙

		755174
年度	参画プロジェクト(昭和 42 年度~平成 15 年度)	種別
1967(昭和 42)年度	徳島県日和佐·牟岐観光有料道施設開発計画	基本計画
1968(昭和 43)年度	徳島県橘湾観光開発計画	基本計画
1969(昭和 44)年度	八代市観光開発計画(日本観光協会作業班参画)	基本構想
1969(昭和 44)年度	南阿波パークウエイ関連施設計画	基本計画
1970(昭和 45)年度	霞ヶ浦浮島地区観光開発計画	基本構想
1970(昭和 45)年度	熊本市観光基本構想	基本構想
1970(昭和 45)年度	菊池市観光開発計画	基本計画
1970(昭和 45)年度	大月町観光総合開発計画	基本構想
1970(昭和 45)年度	横浪スカイライン関連施設計画	基本計画
1971(昭和 46)年度	熊本県広域観光総合開発計画	基本計画
1971(昭和 46)年度	東京都台東区観光開発計画	基本計画
1971(昭和 46)年度	岩本ダム関連地域開発計画	基本構想
1971(昭和 46)年度	渡良瀬遊水池利用計画	基本構想
1971(昭和 46)年度	東北中央大規模レクリエーション都市計画	基本構想
1971(昭和 46)年度	松之山町リゾートコミュニティ実証実験(~47年度)	実施計画
1972(昭和 47)年度	沖縄県石垣島観光総合開発計画	基本計画
1974(昭和 49)年度	熊本県西山地区観光施設整備計画	基本計画
1977(昭和 52)年度	低利用観光地の利用促進対策 I	調査
1977(昭和 52)年度	山ノ内町温泉地総合診断調査	基本構想
1978(昭和 53)年度	Hダム生活再建計画とそれに伴う観光レクリエーション整備計画	基本構想
1978(昭和 53)年度	低利用観光地の利用促進対策Ⅱ(委員参加)	調査
1978(昭和 53)年度	長野県木曽三岳村観光レクリエーション立地診断調査	基本構想
1978(昭和 53)年度	本州四国連絡橋経済調査ー四国観光の実態に関する調査ー	調査
1978(昭和 53)年度	香川県観光地再編成調査、立地診断と再編成基本構想	基本構想
1979 (昭和 54) 年度	本島フィッシングセンターの社有地開発整備計画	基本計画
1979 (昭和 54) 年度	本州四国連絡橋経済調査(瀬戸内海島しょ)	調査
1979 (昭和 54) 年度	戸隠村荒倉周辺地区観光立地診断調査	基本構想
1979 (昭和 54) 年度	香川県小豆島土庄町観光産業振興計画	基本構想
1979 (昭和 54) 年度	超智諸島観光レクリエーション地域整備計画	基本構想
1979 (昭和 54) 年度	秩父地域観光振興調査	基本構想
1979 (昭和 54) 年度	香川県女体山地区周辺施設整備計画	基本構想
1979 (昭和 54) 年度	猿ヶ京温泉再開発調査	基本構想
1979 (昭和 54) 年度	長野県木祖村観光地再整備計画	基本計画
1980(昭和 55)年度	湯西川温泉周辺地域活性化の為の事業化計画(平家の里計画)	実施計画
1980(昭和 55)年度	峠の茶屋再整備計画一文化資源再生計画ー	基本計画
1980(昭和 55)年度	長野県木祖村観光レクリエーション基本計画調査	基本計画
1980(昭和 55)年度	博多湾を中心とする海浜系観光レクリエーションの資源及び整備計画	基本構想
1980(昭和 55)年度	瀬戸大橋関連地域観光施設計画調査	基本計画
1981 (昭和 56) 年度	千葉県鴨川市観光振興基本計画調査	基本計画
1981 (昭和 56) 年度	長野県木祖村観光レクリエーション振興重点地区事業化計画調査	実施計画
1982 (昭和 57) 年度	長野市観光レクリエーション振興計画調査	基本計画
1982(昭和 57)年度	長野県戸隠村観光振興基本構想調査	基本構想
1982 (昭和 57) 年度	長野県臼田町観光レクリエーション振興計画	基本構想
1982(昭和 57)年度	本四架橋経済調査(架橋観光交通及び四国地域入込客数予測調査)	調査
1983 (昭和 58) 年度	栃木県那須町観光基本計画調査	基本計画
1983 (昭和 58) 年度	香川県観音寺観光振興計画調査	基本計画
1983 (昭和 58) 年度	山村地域の活性化に関する調査研究ー広域観光への行政対応ー(高知県)	基本計画
1983 (昭和 58) 年度	観光の時系列分析調査研究	調査
-		•

1002/四和 50) 年度	瀬戸土塔加掛明連しカリエーション作組計画調本(京以末)	甘木計画
1983 (昭和 58) 年度	瀬戸大橋架橋関連レクリエーション振興計画調査(高松市) 大鳴明視塔に伴る関係・鳴明地は観光電電系測調本	基本計画
1983 (昭和 58) 年度 1983 (昭和 58) 年度	大鳴門架橋に伴う門崎・鳴門地域観光需要予測調査 長野市飯綱高原観光基本計画調査	調査 基本計画
1983 (昭和 58) 年度	技野印 財 財 大野 大野 大野 大野 大野 大野	基本計画基本計画
1983 (昭和 58) 年度	千葉宗 宮町観光歴年計画調査 長野県長門町観光振興基本計画調査	基本計画
1983 (昭和 58) 年度	長野県長野地域広域観光診断調査	基本構想
1983 (昭和 58) 年度	長野県上小地域広域観光診断調査	基本構想
1983 (昭和 58) 年度		基本計画
1983 (昭和 58) 年度		基本構想
1983 (昭和 58) 年度	滋賀県伊吹町観光診断調査	基本構想
1984(昭和 59)年度	栃木県那須町那須ストーンパーク整備計画	実施計画
1984(昭和 59)年度	長野市飯綱高原振興基本計画	基本計画
1984(昭和 59) 年度	長野県波田町観光振興基本構想調査	基本構想
1984(昭和 59)年度	千葉県佐原市観光振興実施計画	実施計画
1984(昭和 59)年度	千葉県一宮町観光振興実施計画	実施計画
1984(昭和 59)年度	新潟県湯沢町商工地域ビジョン計画(観光部門)	基本計画
1985 (昭和 60) 年度	栃木県那須町那須体験学習型牧場整備事業化計画	実施計画
1985 (昭和 60) 年度	熊本市の観光都市づくりに関する調査	基本構想
1985 (昭和 60) 年度	栃木県大田原市観光レクリエーョン振興計画	基本計画
1985 (昭和 60) 年度	千葉県九十九里・東総地域観光振興計画	基本計画
1985 (昭和 60) 年度	高松まつり活性化調査	診断調査
1985 (昭和 60) 年度	新潟県刈羽村観光レクリエーション振興計画調査	基本計画
1985 (昭和 60) 年度	宮崎県野尻町観光レクリエーション施設整備計画	基本計画
1985 (昭和 60) 年度	千葉県東庄町観光基本計画調査	基本計画
1985 (昭和 60) 年度	長野県朝日村村おこし事業調査	基本構想
1986(昭和61)年度	湯西川ダム建設に伴う西川地区の生活再建及び周辺地域整備基本計画調査	基本計画
1986(昭和61)年度	刈羽村物産おこし事業(事例分析と事業への取り組み方)	基本構想
1986(昭和61)年度	黒磯市観光振興基本計画	基本計画
1986(昭和61)年度	二本松市観光開発基本構想	基本構想
1986(昭和61)年度	岡山・倉敷国際観光モデル地区整備実施計画	実施計画
1986(昭和61)年度	広島地域国際観光モデル地区整備実施計画	実施計画
1986(昭和61)年度	八田原ダム湖周辺環境整備計画	基本計画
1986(昭和61)年度	商工会の観光振興事業に関する調査	調査
1986(昭和61)年度	新潟県湯沢町むらおこし事業(観光振興)	基本構想
1986(昭和61)年度	湯沢町観光園地整備事業構想調査	事業計画
1987(昭和 62)年度	栃木リゾート地域重点整備地区事業化推進調査	実施計画
1987(昭和 62)年度	日光、宇都宮国際観光モデル地区整備実施計画策定調査	実施計画
1987(昭和 62)年度	松江・出雲国際観光モデル地区整備実施計画策定調査	実施計画
1987(昭和 62)年度	大芦高原整備計画調査	基本計画
1987(昭和 62)年度	大田原施設整備計画調査	基本計画
1987(昭和 62)年度	岡山博覧会入場者予測調査	調査
1987 (昭和 62) 年度	かたくなの里事業化計画	事業計画
1987(昭和 62)年度	金山町アメニティ・リゾート計画	基本計画
1987(昭和 62)年度	制行峰複合リゾート整備事業計画 アステルは5000000000000000000000000000000000000	事業計画
1987(昭和 62)年度	群馬県観光振興基本計画	基本計画
1987(昭和 62)年度	立田山観光地整備調査、ルート見直し調査	基本計画
1987(昭和 62)年度	野尻湖レジャーパーク事業採算検討調査	事業計画
1987(昭和 62)年度	湯沢町観光施設整備計画調査	基本計画
1987(昭和 62)年度	リフレッシュリゾート・しまね構想調査	基本計画
1987(昭和 62)年度 1988(昭和 63)年度	商工会の観光事業振興に関する調査 倉敷市下津井周辺リゾート整備基本計画調査	調査 基本計画

1988 (昭和 63) 年度	分水町観光サービス施設立地計画調査	実施計画
1988(昭和 63)年度	隠岐フラワートピアリゾート整備計画	基本計画
1988 (昭和 63) 年度	前高原観光牧場事業化計画策定調査	実施計画
1988 (昭和 63) 年度	大胡町観光牧場整備計画	基本計画
1988 (昭和 63) 年度	長野県北部広域観光振興調査	基本構想
1988(昭和 63)年度	伊勢志摩リゾート事例研究調査	調査
1988(昭和 63)年度	肥前町観光開発ビジョン策定基本調査	基本計画
1988(昭和 63)年度	岐阜県春日村観光振興基本計画策定調査	基本計画
1988 (昭和 63) 年度	岡山県内スキー場の活性化	基本構想
1988 (昭和 63) 年度	大胡町観光牧場事業計画	実施計画
1988 (昭和 63) 年度	ふるさとあらい21 リゾート構想	基本構想
1989 (平成元) 年度	若狭小浜21観光ビジョン策定調査	基本計画
1989(平成元)年度	スカイスポーツ地域整備計画	基本構想
1989 (平成元) 年度	ひめはるの里第Ⅱ期整備計画策定調査	基本計画
1989 (平成元) 年度	大胡町ふるさと創世計画	実施計画
1989(平成元)年度	藤ヶ鳴地区臨空港レクリエーションパーク構想	基本構想
1989(平成元)年度	めん羊の里整備事業実施計画	実施計画
1989 (平成元) 年度	男鹿北部観光開発ビジョン作成	基本構想
1989 (平成元) 年度	外海町地域総合開発ビジョン策定調査	基本構想
1989 (平成元) 年度	柿崎町観光産業育成ビジョン作成基礎調査	基本構想
1989 (平成元) 年度	金山町自然教育村活性化計画	基本計画
1989 (平成元) 年度	ふるさとあらい2000リゾート構想	基本計画
1989(平成元)年度	武石村ともしび博物館周辺文化観光拠点整備計画	基本計画
1990(平成2)年度	那須温泉湯本園地整備基本計画調査	基本計画
1990(平成2)年度	平家の里拡充構想	基本構想
1990(平成2)年度	旧山高の活用計画調査	実施計画
1990(平成2)年度	スカイレジャー振興調査	調査
1990(平成2)年度	熊本市観光アクションプログラム策定業務	基本計画
1990(平成2)年度	市原市観光振興実施計画策定業務	実施計画
1990(平成2)年度	都城市観光開発実施計画調査	基本計画
1990(平成2)年度	島根中央地域リゾート構想推進調査構想推進協議会	基本計画
1990(平成2)年度	秦野市弘法山地区観光整備計画業務	基本構想
1990(平成2)年度	若美町観光開発ビジョン作成調査	基本計画
1990(平成2)年度	新島根県観光基本計画策定	基本計画
1990(平成2)年度	男鹿山牧場周辺整備事業観光開発ビジョン	実施計画
1990(平成2)年度	川本町リゾート整備基本計画	基本計画
1990(平成2)年度	松川町開発計画調査検討業務	基本計画
1991(平成3)年度	地場産業会館基本調査	基本構想
1991(平成3)年度	「旧山高」整備基本計画調査	基本計画
1991(平成3)年度	スカイレジャー振興対策の基礎的な検討に関する調査	調査
1991(平成3)年度	スカイレジャー振興調査	調査
1991(平成3)年度	国際観光地「那須」活性化基本計画策定調査	基本計画
1991(平成3)年度	隠岐緑水園増改築計画調査	実施計画
1991(平成3)年度	熊本市金峰山有明海沿岸地域整備計画	基本計画
1991(平成3)年度	鴨川市観光物産センター設立調査	基本計画
1991(平成3)年度	長野市観光振興基本計画策定	基本計画
1991(平成3)年度	街道景観形成計画策定事業(那須町)	基本計画
1991(平成3)年度	東三瓶フラワーバレー基本構想検討業務	基本構想
1991(平成3)年度	四国観光拠点開発整備計画調査	基本構想
1991(平成3)年度	街道景観形成計画策定事業(黒磯市)	基本計画
1992(平成4)年度	(仮称)地場産業会館基本計画	基本計画

1992(平成4)年度	国際観光地「那須」活性化基本計画	基本計画
1992(平成4)年度	下津井「旧山高」活用事業展示計画	基本設計
1992(平成4)年度	伝説地周辺環境整備事業基本計画	基本計画
1992(平成4)年度	那須湯本園地モニュメント製作	実施設計
1992(平成4)年度	那須湯本園地実施設計	実施設計
1992(平成4)年度	那須湯本園地公衆便所整備実施設計	実施設計
1992(平成4)年度	城ケ島新観光施設整備基本構想	基本構想
1992(平成4)年度	南箕輪村大泉所観光開発計画調査	基本計画
1992(平成4)年度	高松市コンベンション振興基本方針・基本計画	基本計画
1992(平成4)年度	源実朝公御首塚周辺整備基本構想	基本構想
1992(平成4)年度	海洋性レクリエーションの普及に関する調査	基本計画
1992(平成4)年度	八溝地域の里づくり整備事業計画	実施計画
1992(平成4)年度	高知市観光振興基本計画	基本計画
1992(平成4)年度	鴨川市観光物産センター設立調査基本計画	基本計画
1992(平成4)年度	沼田公園長期整備構想波及効果調査	調査
1992(平成4)年度	国見スキーリゾート開発による地域波及効果調査	調査
1992(平成4)年度	板室温泉幾世荘跡地利用計画	基本計画
1992(平成4)年度	板室温泉幾世荘保養の館基本設計	基本設計
1992(平成4)年度	湯沢町土地利用計画調査	基本計画
1992(平成4)年度	四国観光拠点開発整備計画調査	基本計画
1992(平成4)年度	熊本港背後地整備基本構想調査	基本構想
1993(平成5)年度	下津井地区拠点施設整備事業・展示設計	実施設計
1993(平成5)年度	塩那地区広域観光基本計画	基本計画
1993(平成5)年度	只見町21世紀ビジョン策定事業	基本構想
1993(平成5)年度	高知市観光振興基本計画策定業務	基本計画
1993(平成5)年度	国際観光地「那須地域」活性化実施計画	実施計画
1993(平成5)年度	黒磯市さわやか高原文化観光ビジョン作成事業	基本計画
1993(平成5)年度	城ケ島等新観光拠点整備基本計画	基本計画
1993(平成5)年度	日光・宇都宮市国際観光モデル地区実態調査	調査
1993(平成5)年度	家族旅行村「安心院」周辺の観光レクリエーション再整備計画	基本計画
1993(平成5)年度	板室保養の館基本計画	基本計画
1993(平成5)年度	温海町「しゃりん」周辺整備基本計画策定調査	基本計画
1993(平成5)年度	九州広域国際観光ルート調査	基本構想
1994(平成6)年度	那須湯本地区町づくり計画	基本計画
1994(平成6)年度	むかし下津井回船問屋資料館の展示制作・設計監理	設計監理
1994(平成6)年度	むかし下津井回船問屋資料館展示品解説事業	実施計画
1994(平成6)年度	佐原市新観光振興実施計画	実施計画
1994(平成6)年度	作成金峰山観光文化調査	基本構想
1994(平成6)年度	「マロニエプラン21(二期計画)」に係わる基礎調査(栃木県)	調査
1994(平成6)年度	会津金山スキー場整備計画基礎調査	基本構想
1994(平成6)年度	観光情報システム基本調査(箱根町)	基本計画
1994(平成6)年度	地場産業の観光活用調査(北信地域)	基本構想
1994(平成6)年度	大山西部地域活性化調査	基本計画
1995(平成7)年度	むかし下津井回船問屋資料館のパンフレット作成業務	実施計画
1995(平成7)年度	金峰山観光文化施設整備基本計画策定業務	基本計画
1995(平成7)年度	観光ふくい21世紀プラン策定調査	基本構想
1995(平成7)年度	会津金山スキー場実施設計	実施設計
1995(平成7)年度	ゆとりある国民生活の実現に資する海上レクリエーション調査	調査
1995(平成7)年度	伊勢志摩であい交流スクエア整備調査	基本構想
1995(平成7)年度	道路整備による木曽地域へのインパクト調査	調査
1995(平成7)年度	飛騨キャトルパーク基本計画策定業務	基本計画

1995(平成7)年度	七戸町観光振興計画策定調査	基本構想
1995(平成7)年度	柏崎市民スキー場整備計画策定調査	基本構想
1996(平成8)年度	「金峰山ロープウェイ」整備事業化実施可能性	実施計画
1996(平成8)年度	ゆとりある国民生活の実現に資する海事レクリエーション調査	調査
1996(平成8)年度	キャトルパーク関連道路に関する交通量と開催候補地(3ヶ所)の造成に関する検討(パート1)	調査
1996(平成8)年度	キャトルパーク候補地造成に関する検討(パート2)	調査
1996(平成8)年度	福井県観光物産館に係わる基礎調査	基本計画
1996(平成8)年度	新井市観光振興基本計画策定事業	基本計画
1997(平成9)年度	岡山県下津井展示館収集品の見直し計画	基本計画
1997(平成9)年度	長野県下伊那地域広域観光地整備に係わる需要調査-三遠南信地域連携 軸調査	調査
1997(平成9)年度	茨城県袋田の滝周辺整備計画	基本計画
1997(平成9)年度	福井県若狭小浜工芸の里構想基本計画策定業務	基本計画
1997(平成9)年度	岩手県八幡平地域観光振興計画策定調査協議会	基本計画
1997(平成9)年度	岐阜県清見村ふるさと館事業化計画	実施計画
1997(平成9)年度	新潟県新井市西部地区観光振興プログラム研究事業	実施計画
1997(平成9)年度	岐阜県清見村キャトルパーク土地利用(施設配置)計画業務	実施計画
1997(平成9)年度	長崎県離島振興計画基礎調査	基本計画
1997(平成9)年度	外客来訪促進計画に係る基礎調査	基本調査
1997(平成9)年度	飯伊地域滞在型·拠点型旅行促進事業	基本計画
1997(平成9)年度	三好西部地区観光地づくり推進モデル事業	基本計画
1997(平成9)年度	外客来訪促進計画策定に係る基礎調査及び同計画策定調査業務	基本計画
1998 (平成 10) 年度	只見町中心市街地活性化計画(道の駅等)	基本構想
1998(平成 10)年度	糸満市観光農園(仮称)推進計画~自治省リーディングプロジェクト~	実施計画
1999(平成 11)年度	智頭町交流観光基本調査	基本構想
1999(平成 11)年度	智頭町交流観光基本計画(全体計画)業務	基本計画
1999(平成 11)年度	智頭町田園空間博物館基本計画業務	基本計画
1999(平成 11)年度	伝統的観光地における観光経済構造の実態に関する調査研究に伴う基礎調 査(紀伊白浜)	調査
1999(平成 11)年度	広域交通の結節性を活かした複合機能都市づくりに関する調査研究に伴う 基礎調査(四街道市)	基本構想
1999(平成 11)年度	三好西部地区観光地づくり推進モデル事業)	基本構想
2000 (平成 12) 年度	高原リゾート振興を核とした産業の複合化に関する調査研究に伴う基礎調査	
	(山梨県小淵沢町)	調査
2000 (平成 12) 年度	地域資源活用による高齢者の生きがいと地域活性化に関する調査研究に伴う 基礎調査(福祉と観光交流の連携)(佐賀県肥前町)	調査
2000(平成 12)年度	さんりく・リアス・リゾート見直し調査(岩手県三陸地域)	基本構想
2000(平成 12)年度	リゾート地づくり事業(鹿児島県種子島・屋久島)	調査
2001 (平成 13) 年度	沿岸地域の保全と活用に関する調査研究に伴う基礎調査(静岡県浅羽町)	基本構想
2001(平成 13)年度	若い世代に魅力ある地域創造に関する調査研究に伴う基礎調査	調査
	(和歌山県海南市)~古い町並み、インパクト事例調査~	
2001(平成 13)年度	湯沢温泉通り活性化基本計画に関する総合ディレクターの派遣業務	基本計画
2001 (平成 13) 年度	湯沢温泉通り活性化基本計画アドバイザー業務	基本計画
2001 (平成 13) 年度	柏崎西部地域観光振興総合計画作成業務	基本構想
2002 (平成 14) 年度	那須町観光振興基本計画策定業務	基本構想
2002(平成 14)年度	智頭町観光まちづくりプログラム実施支援事業	実施計画
2002 (平成 14) 年度	財団法人鳥取県観光事業団在り方調査(公設観光レク施設の経営改善)	基本計画
2002 (平成 14) 年度	外国人観光客誘致による観光地活性化方策に関する検討調査(草津町等)	基本構想
2002(平成 14)年度	平和・学習拠点形成によるまちづくりの推進に関する調査研究に伴う基礎調査 (近代戦争遺跡の学習観光への活用、館山市)	基本構想

2003 (平成 15) 年度	那須町観光振興基本計画策定業務	基本計画
2003(平成 15)年度	体験観光プログラム事例調査	調査
2003 (平成 15) 年度	兵庫県家島諸島観光調査(アドバイス含)	調査
2003 (平成 15) 年度	渓谷温泉地活性化調査(含)(飯田市)	基本構想

⁽注)上記内容はジュビオ、ジェド時代のものである。2004年以降2016年まで大学専任教員として参画したプロジェクトは省く。

表3 学会・社会活動

別紙

年度	参画プロジェクト
1975 (昭和 50) 年度	ダム水没者生活再建対策事例研究報告
1975 (昭和 50) 年度	
1978 (昭和 53) 年度	低利用観光地の利用促進対策 II 検討委員
1978 (昭和 53) 年度	「観光レクリエーションからみた地域振興のあり方」講演講師
1978 (昭和 53) 年度	「望ましい観光地づくりを考える-愛媛県一日観光講座-」講演講師
1978 (昭和 53) 年度	「産業部門別過疎対策の方向」講演講師
1979 (昭和 54) 年度	「今後の観光レクリエーション振興のあり方」講演講師
1980(昭和 55)年度	長野県観光政策審議会委員・専門調査員
1980(昭和55)年度	「離島における定住条件の整備に関する調査研究(隠岐島)」委員
1980(昭和55)年度	「スキー場整備の今後のあり方」講演講師
1980(昭和 55)年度	「夏季学生村の現状と課題」講演講師
1981 (昭和 56) 年度	「低利用観光地の利用促進」講演講師(一日観光講座)
1981 (昭和 56) 年度	「観光と地域社会ー新幹線、高速道路のインパクトに対応する
	観光からの町づくりー」講演講師
1981 (昭和 56) 年度	秋田県文化行政研究委員会委員
1981 (昭和 56) 年度	山梨県甲府市観光基本計画策定調査委員会委員
1981 (昭和 56) 年度	北海道東北を考える 21 世紀展望研究会専門アドバイザー
1981 (昭和 56) 年度	長野県観光開発審議会委員・専門調査員
1981 (昭和 56) 年度	│ 栃木県観光振興基本方針策定委員会委員 │
1981 (昭和 56) 年度	岡山県中部高原地域開発整備構想専門委員会委員
1981 (昭和 56) 年度	「観光を軸とした地域振興実践論」講演講師
1982 (昭和 57) 年度	神奈川県観光審議会専門委員(基本計画策定)
1982 (昭和 57) 年度	長野県観光開発審議会委員、同専門調査員
1982 (昭和 57) 年度	岡山県中部地域開発専門委員会委員
1982 (昭和 57) 年度	福井県宮崎村振興計画専門委員会委員
1982 (昭和 57) 年度	香川県丸亀市再開発委員会委員
1982 (昭和 57) 年度	観光活性化懇談会メンバー
1982 (昭和 57) 年度	「観光需要の時系列分析」調査研究委員
1982 (昭和 57) 年度	北海道・東北 21 世紀展望研究会アドバイザー
1982 (昭和 57) 年度	「山村文化交流ふるさと復活祭」アドバイザー(妙高村東部地区)
1983 (昭和 58) 年度	中小都市文化行政調査研究委員会委員
1983 (昭和 58) 年度	新井市ホワイトピア構想研究委員
1983 (昭和 58) 年度	商工地域ビジョン講師・観光部門委員長(新潟県湯沢町)
1983 (昭和 58) 年度	21 世紀町づくり青年部懇談会講師
1983 (昭和 58) 年度	[21 世紀の山形を考えるシンポジウム」パネリスト
1983 (昭和 58) 年度	「後別おこしシンポジウム」ゲストパネリスト
1983 (昭和 58) 年度	「観光の現状と課題」ー更埴市及び広域ーについての講演講師
1983 (昭和 58) 年度	「本四架橋と観光」講演講師
1983 (昭和 58) 年度	「自然開発と観光」講演講師
1984(昭和 59)年度	「第2次離島研究会」事務局長担当
1984 (昭和 59) 年度	「混住地域の実態と地域形成に関する調査研究」委員
1984(昭和 59)年度	「都市文化の保全と創造に関する調査」委員

1984(昭和 59)年度	観光地活性化手法の調査研究委員
1984(昭和 59)年度	「那須高原をよくする会」アドバイザー
1984(昭和59)年度	長野県観光シンポジウムパネリスト
1984(昭和 59)年度	「群馬県長野原町河原湯温泉の観光による水没者生活再建」講演講師
1984(昭和 59)年度	小諸市街地づくりシンポジウムパネリスト
1984(昭和59)年度	「レジャーマーケットの動向と観光地の特色づくり・地域づくり」(茅野市)研修講師
1984(昭和 59)年度	「地場産品と観光ビジネスとの業務提携」(飯田市)研修講師
1984(昭和 59)年度	越後湯沢町内商工地域ビジョン講演講師
1984(昭和 59)年度	総理府観光政策審議会専門委員(「国際観光モデル地区」検討、昭和 59/11~平成元/12)
1984(昭和 59)年度	「観光地の活性化」に関する講演講師
1984(昭和 59)年度	「長野県上小広域の観光振興について」講演講師
1984(昭和 59)年度	「石垣・石屋根は残れるか」街並み保存シンポジウムパネリスト
1984(昭和 59)年度	「チャームアップ信州」(佐久町観光地づくり)アドバイザー
1985 (昭和 60) 年度	「市町村行政連携のための情報システムの形成と
	情報拠点の確立に関する研究」委員(岐阜県)
1985 (昭和 60) 年度	自立的、個性的な地域社会の創造に関する調査研究(島根県)委員
1985 (昭和 60) 年度	高速交通体系整備による社会経済構造の転換と
1005 (四和 60) 左座	広域的行政対応の調査研究(茨城県)委員
1985 (昭和 60) 年度 1985 (昭和 60) 年度	「地方中核都市の形成方策に関する調査研究」委員(佐賀県) 新潟県新井市ホワイトピア構想研究委員
1985 (昭和 60) 年度	新潟県
	新潟県青海地域ビジョン実施計画アドバイザー ・ おります では、
1985 (昭和 60) 年度 1985 (昭和 60) 年度	新潟県 海地域 に ジョン 美施計画 アドハイ リー 長野県チャームアップ信州モデル事業アドバイザー(和田村)
1985 (昭和 60) 年度	長野県朝日村村おこし事業専門委員
1985 (昭和 60) 年度	長野県南木曽町妻篭宿見直し調査委員
1985 (昭和 60) 年度	
1985 (昭和 60) 年度	
1985 (昭和 60) 年度	青森県三沢市商工地域ビジョン専門委員
1985 (昭和 60) 年度	「新都市拠点整備事業の展開」講演・アドバイザー(下関市)
1985 (昭和 60) 年度	ヨーロッパ観光行政視察団(調査員)
1985 (昭和 60) 年度	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1
1985 (昭和 60) 年度	長野県企業研修センター経営管理大学校講師
1985 (昭和 60) 年度	長野県南木曽町妻篭宿ゼミナールアドバイザー
1985 (昭和 60) 年度	「長野県赤沼地区下水道処理場の建築と地区振興の方向づけ」講演講師
1985 (昭和 60) 年度	北海道観光連盟全道大会基調講演講師
1985 (昭和 60) 年度	高知県嶺北地域吉野川流域シンポジウム特別講演講師・パネリスト
1985 (昭和 60) 年度	熊本市観光フォーラム基調講演講師
1985 (昭和 60) 年度	埼玉県「まちづくりとしての観光」講演講師
1985 (昭和 60) 年度	「文化アセスメントマニュアル」作成アドバイザー
1985 (昭和 60) 年度	長野県観光開発審議会委員、同専門調査員
1985 (昭和 60) 年度	地方自治体観光行政の実態調査調査員
1986 (昭和 61) 年度	神奈川県観光審議会委員
1986 (昭和 61) 年度	国際観光モデル地区計画策定支援委員会委員
1986(昭和 61)年度	地方中核都市の形成方策に関する調査研究委員

1986(昭和 61)年度	地域産業・文化の新たなる展開方策に関する調査研究委員(鳥取中央広域圏)
1986(昭和 61)年度	新潟県湯沢町商工会村おこし事業アドバイザー
1986(昭和61)年度	長野県麻績村商工会村おこし事業アドバイザー
1986(昭和61)年度	新潟県青海町商工会村おこし事業アドバイザー
1986(昭和61)年度	離島コミュニティ活性化方策に関する調査研究委員
1986(昭和 61)年度	妻篭宿見直し調査委員
1986(昭和61)年度	長野県企業研修講演講師(軽井沢)
1986(昭和 61)年度	中小企業大学校セミナー講演講師
1986(昭和 61)年度	新潟県津南町観光講演講師
1986(昭和61)年度	日本観光協会観光講座(京都)講師
1986(昭和61)年度	新潟県新発田市地区振興研修会講師
1986(昭和61)年度	小諸新幹線シンポジウム(パート3)パネリスト
1986(昭和61)年度	離島の観光戦略を考えるシンポジウムパネリスト
1986(昭和61)年度	アイランドフォーラム'87 パネリスト
1987(昭和 62)年度	長野県観光開発審議会委員、同専門調査委員
1987(昭和 62)年度	千葉県リゾート法基礎調査委員
1987(昭和 62)年度	神奈川県観光審議会(観光基本計画)委員
1987(昭和 62)年度	日光・宇都宮国際観光モデル地区整備実施計画基礎調査委員
1987(昭和 62)年度	熊本市観光懇話会顧問
1987(昭和 62)年度	佐賀県北部地域振興方策調査研究委員
1987(昭和 62)年度	東北電源地域振興対策調査委員
1987(昭和 62)年度	妻篭宿(重伝建地区)見直調査アドバイザー
1987(昭和 62)年度	新潟県商工会連合会地域問題調査研究特別委員会委員
1987(昭和 62)年度	新潟県小木町行政職員研修アドバイザー
1987(昭和 62)年度	「新時代の観光振興について」講演講師(北海道)
1987(昭和 62)年度	「瀬戸大橋時代の地域づくり(略称)シンポジウム基調講演講師
1987(昭和 62)年度	「日本に本当のバカンス時代が訪れるか」観光総合講座研修講師(秋田市)
1987(昭和 62)年度	中小企業大学校研修会講師
1987(昭和 62)年度	長野県経営管理大学校講師(長野市、松代町、木曽福島町)
1987(昭和 62)年度	長野市更北地区振興講演会講師
1987(昭和 62)年度	"青海バトン座 21"シンポジウムコーディネーター
1987(昭和 62)年度	「新潟県西蒲原郡の観光振興と地域活性化」シンポジウムパネリスト
1987(昭和 62)年度	「観光情報拠点の研究」講演講師
1988 (昭和 63) 年度	国土庁初代地方振興アドバイザー
1988 (昭和 63) 年度	長野県観光開発審議会委員・専門調査員
1988 (昭和 63) 年度	日光・宇都宮国際観光モデル地区推進検討委員会委員
1988 (昭和 63) 年度	長野県新地場産業開発ブレーン(アドバイザー)
1988 (昭和 63) 年度	長野県経営管理大学校講師(飯山市)
1988 (昭和 63) 年度	大門地域まちづくり委員会委員(長野市)
1988 (昭和 63) 年度	熊本市観光懇談会顧問
1988 (昭和 63) 年度	茨城県常陸太田市文化交流センター愛称検討委員会委員
1988 (昭和 63) 年度	自治省リーディングプロジェクト「ユニバーシティ羽黒構想」委員
1988 (昭和 63) 年度	離島コミュニティの活性化方策に関する調査研究委員
1988 (昭和 63) 年度	渋谷区行政職員研修講師

1988 (昭和 63) 年度	長野県観光地所在町村協議会研修基調講演講師
1988(昭和 63)年度	東信JC合同パネルディスカッションコーディネーター
1988(昭和 63)年度	日本観光研究者連合全国大会コメンテーター
1989(平成元)年度	長野県観光開発審議会委員・専門調査員
1989(平成元)年度	長野県観光グランドデザイン会議委員
1989(平成元)年度	日光・宇都宮国際観光モデル地区推進検討委員会委員
1989(平成元)年度	滞在型観光地の整備・運営に関する調査研究委員
1989(平成元)年度	離島への産業誘導方策に関する調査委員
1989(平成元)年度	総合保養地域に伴う地域活性化政策に関する調査研究委員
1989(平成元)年度	熊本県観光振興懇談会顧問
1989(平成元)年度	長野県経営管理大学校講師(茅野市)
1989(平成元)年度	長野県商工連合大会シンポジウム基調講演及びパネリスト
1989(平成元)年度	長野県箕輪町まちづくりシンポジウムパネリスト
1989(平成元)年度	全日本観光都市連盟総会記念講演講師
1989(平成元)年度	奥会津ふるさとリゾートシンポジウムパネリスト
1989(平成元)年度	長野県栄町商工会講演講師
1989(平成元)年度	新潟県高柳町ふるさと開発協議会講演講師
1989(平成元)年度	福島県只見町まちづくり講演講師
1989(平成元)年度	「都市社会の創造に関する開発」座談会委員
1990(平成2)年度	長野県観光開発審議会委員・専門調査員
1990(平成2)年度	長野県観光グランドデザイン会議委員
1990(平成2)年度	岩手県観光審議会専門委員
1990(平成2)年度	地方自治体観光行政の実態調査(都道府県観光白書)専門委員
1990(平成2)年度	滞在型観光地の整備運営に関する調査委員
1990(平成2)年度	中央内陸圏研究会委員(国土庁)
1990(平成2)年度	離島への産業誘導方策に関する調査研究委員
1990(平成2)年度	離島振興法法制研究会委員
1990(平成2)年度	町民まつり見直しアドバイザー(知内町)
1990(平成2)年度	「上信越自動車道藤岡地区IC周辺の土地利用構想に関する提言」講師
1990(平成2)年度	日本観光研究者連合理事(平成2~3年度)
1990(平成2)年度	宝塚市観光協会総会記念講演会講師
1990(平成2)年度	中央温泉研究所研修シンポジウムパネリスト
1991 (平成 3) 年度	日本観光研究者連合理事
1991(平成3)年度	中央内陸圏研究会委員
1991(平成3)年度	岩手県観光審議会専門委員
1991(平成3)年度	長野県観光開発審議会委員・同専門調査員
1991(平成3)年度	離島への産業誘導に関する調査研究委員
1991(平成3)年度	高松市観光センター研究会アドバイザー
1991(平成3)年度	ウォータール一大学リゾートスクールセミナー講師
1991(平成3)年度	21 世紀下北半島の旅シンポジウムパネリスト・基調講演講師
1991(平成3)年度	佐久市岩村田土地区画整理等懇談会アドバイザー
1991(平成3)年度	町民まつり見直しアドバイザー(知内町)
1991(平成3)年度	柏崎・刈羽プラザ'91 まちづくり検討会イベント部会コーディネーター
1991(平成3)年度	愛媛県内海村"パールシンポジウム"パネリスト

1991(平成3)年度	利根・沼田ふるさと市町村圏観光会議講師
1991(平成3)年度	富士五湖地域総合研究会公開シンポジウムパネリスト
1991(平成3)年度	新井市・千草石研究会委員
1991(平成3)年度	北米観光地及び温泉地活性化研修調査(サンアントニオ、アスペン、ホットスプリン
	ググス、グレンウッズスプリングス、サンフランシスコ等)
1991(平成3)年度	日本観光研究者連合理事
1992(平成4)年度	日本観光研究者連合理事
1992(平成4)年度	長野県観光開発審議会委員・専門調査員
1992(平成4)年度	「離島における文化遺産・自然環境の保全と活用による
1000/= + 1) = +	地域振興方策に関する調査」委員
1992(平成4)年度	第一回「地域産品・観光おこし研修会」講師((財)地域活性化センター)
1992(平成4)年度	「サマーカーニバルIN知内」見直しアドバイザー
1992(平成4)年度	青森県観光地所在町村首長現地研修基調講演講師(「観光と地域振興」)
1992(平成4)年度	三重県観光基本計画スーパーバイザー
1992(平成4)年度	長野県牟礼村家族旅行村再整備アドバイザー
1992(平成4)年度	第一回離島大学講師(離島コミュニティの活性化担当)
1992(平成4)年度	「リゾートと地域振興」講演講師
1993(平成5)年度	日本観光研究者連合理事
1993(平成5)年度	長野県観光開発審議会委員・専門調査員
1993(平成5)年度	山形県地域づくりアドバイザー
1993(平成5)年度	「離島における文化遺産・自然環境の保全と活用による
1002(亚战后) 左曲	地域振興方策に関する調査」委員 (財) 電源地域振興センターアドバイザー(新潟県湯之谷村:ダム建設と観光振興)
1993(平成5)年度	
1993(平成5)年度	佐久市岩村田駅前再整備シンポジウム基調講演 ・コーディネーター「魅力と風格のあるまちをめざして」
1993(平成5)年度	只見町 21 世紀地域ビジョン策定委員・専門指導員
1993(平成5)年度	第二回「地域産品・観光おこし研修会」講師((財)地域活性化センター)
1993(平成5)年度	「リゾート・観光と地域振興」研修会講師
1994 (平成6)年度	長野県観光開発審議会委員・専門調査員
1994 (平成6)年度	山形県地域づくりアドバイザー
1994 (平成6)年度	茨城県過疎市町村長研修会講師(「観光振興と地域活性化」)
1994 (平成6)年度	(財)市町村アカデミー離島職員研修会講師(「離島の生活環境整備」)
1994 (平成6)年度	新潟県小木町総合計画セミナー「総合計画と離島振興」基調講演講師
1994 (平成6)年度	観光物産振興基調講演講師(「観光と地域振興」、(財)地域活性化センター)
1994 (平成6)年度	観光物産振興研修講師((財)地域活性化センター)
1994 (平成6)年度	山形県北村山地域活性化「広域観光への対応」アドバイザー
1994 (平成6)年度	山形県「工芸の里整備事業」(フィジビリティスタディ)アドバイザー
1994 (平成6)年度	「揚水発電関連産業指導事業・新潟県湯之谷村・温泉地区の活性化」アドバイザー
1994 (平成6)年度	長野県商工会地域懇談会基調講演講師(「広域観光への対応」)
1994 (平成6)年度	日本観光研究者連合総合シンポジウム「21 世紀の観光展望」パネリスト
1995(平成7)年度	長野県観光開発審議会委員・専門調査員
1995(平成7)年度	山形県地域づくりアドバイザー
1995(平成7)年度	熊本市観光振興懇談会顧問
1995(平成7)年度	「短距離新交通システム導入に関する調査研究(略称)」委員
1995(平成7)年度	山形県最上・北村山地域振興講演講(「旧出羽三山・葉山地域の活性化を考える」)

1995(平成7)年度	山形県北村山地域観光関係者研修会「観光をめぐる新潮流、グリーン・ツーリズムの 考え方、広域観光への対応方向」基調講演講師
1995(平成7)年度	茨城県総合保養地域振興協議会記念講演講師(「リゾート地域の活性化」)
1995(平成7)年度	築北広域懇談会「曼荼羅の里・ふるさと体験ツアーの創造にむけて」基調講演講師
1995(平成7)年度	大山寺地区活性化計画住民報告会講師
1995(平成7)年度	「21 世紀を展望した離島振興の視点
	ー交流と来往の促進による"固有文化の島"づくりーを考える」
1996(平成8)年度	日本観光研究学会理事
1996(平成8)年度	山形県地域づくりアドバイザー
1996(平成8)年度	山形県生涯学習登録アドバイザー
1996(平成8)年度	長野県観光開発審議会委員・専門調査員
1996(平成8)年度	熊本市観光振興懇談会顧問
1996(平成8)年度	水環境指標研究会委員
1996(平成8)年度	阿波歴史文化回廊構想研究委員
1996(平成8)年度	福井県観光ビジョン策定アドバイザー
1996(平成8)年度	岩手県葛巻町活性化アドバイザー
1996(平成8)年度	茨城県久慈川流域利用アドバイザー
1996(平成8)年度	東京都三宅村村制 40 周年記念講演講師
1996(平成8)年度	「黒磯市商業活性化の在り方」講演講師
1996(平成8)年度	山形県戸沢村グリーン・ツーリズムアドバイザー
1996(平成8)年度	新潟県新井市地域間交流懇談会講師
1996(平成8)年度	福島県只見町活性化3K運動委員会委員
1996(平成8)年度	小浜観光活性化シンポジウム 基調講演講師
1996(平成8)年度	群馬県たくみの里 10 周年記念シンポジウムパネリスト
1997(平成9)年度	日本観光研究学会理事
1997(平成9)年度	山形県地域づくりアドバイザー
1997(平成9)年度	長野県観光開発審議会委員・専門調査員
1997(平成9)年度	日本工人・技の会顧問
1997(平成9)年度	離島の輸送問題検討委員会(略称)委員
1997(平成9)年度	長崎県大型離島振興検討委員会(略称)委員
1997(平成9)年度	四街道市インター周辺土地利用研究会委員
1997(平成9)年度	三重県伊勢市観光活性化アドバイザー
1997(平成9)年度	宮崎県市町村企画職員研修会講師
1997(平成9)年度	東京都三宅島観光シンポジウム基調講演講師
1997(平成9)年度	静岡県「人の集まる観光地づくり」講演講師
1997(平成9)年度	小浜市観光活性化シンポジウム基調講演講師
1997(平成9)年度	観光地づくりセミナーコーディネーター (宮崎県綾町)
1997(平成9)年度	半島ツーリズム東松浦半島企画・コーディネーター
1997(平成9)年度	「対馬地区観光活性化の集い」基調講演講師
1997(平成9)年度	新井・頚南地域広域観光活性化研修会講師
1997(平成9)年度	福島空港国際化と地域づくり研究会委員
1998 (平成 10) 年度	日本観光研究学会理事
1998 (平成 10) 年度	山形県地域づくりアドバイザー
1998 (平成 10) 年度	長野県観光開発審議会委員・専門調査員

1998(平成 10)年度	長崎県総合計画審議会委員
1998 (平成 10) 年度	日本工人・技の会顧問
1998 (平成 10) 年度	福島県歳時記の郷・奥会津検討委員
1998 (平成 10) 年度	UNWTO(世界観光機関)国際観光シンポ ジウム神戸会議パネリスト
1998 (平成 10) 年度	「観光による島の活性化シンポジウム」基調講演講師
1998 (平成 10) 年度	新井市広域観光・交流振興アドバイザー
1998 (平成 10) 年度	静岡県初島クラブ視察調査員
1998 (平成 10) 年度	房総半島研究会(リゾート開発)委員
1998 (平成 10) 年度	歳時記の郷奥会津シンポジウムパネリスト
1999(平成 11)年度	山形県地域づくりアドバイザー
1999(平成 11)年度	長野県観光開発審議会委員・専門調査員
1999(平成 11)年度	長崎県総合計画審議会委員
1999(平成 11)年度	長崎県しまの活性化プラン推進会議委員
1999(平成11)年度	福島県歳時記の郷・シンポジウムパネリスト
1999(平成11)年度	福島県奥会津活性化委員会委員
1999(平成11)年度	半島人づくりフォーラムアドバイザー
1999(平成11)年度	福島空港国際化と地域づくり研究会委員
1999(平成11)年度	福島空港台湾PR・訪日需要調査委員
1999(平成11)年度	観光地づくり実践セミナー講師
1999(平成11)年度	国内観光促進フォーラム基調講演講師
1999(平成11)年度	「地域情報会議イン沖縄」パネリスト
1999(平成 11)年度	日本工人・技の会顧問
1999(平成11)年度	「国営公園整備のインパクト対策」講演講師
1999(平成 11)年度	福島県只見町中心市街地活性化アドバイザー
2000(平成 12)年度	離島の果たす多面的機能に関する調査(略称)委員
2000(平成 12)年度	長野県観光開発審議会委員・専門調査員
2000 (平成 12) 年度	長崎県総合計画審議会委員
2000(平成 12)年度	福祉と交流観光によるまちづくり調査委員
2000 (平成 12) 年度	離島振興法改正検討会議委員
2000 (平成 12) 年度	長崎県しまの活性化検討会議委員
2000 (平成 12) 年度	福島空港国際化と地域づくり研究会委員
2000 (平成 12) 年度	福島空港シンポジウムパネリスト
2000(平成 12)年度	観光まちづくりアドバイザー
2000 (平成 12) 年度	島根県隠岐諸島島後地域(西郷町、都万村、五箇村、布施村)広域観光アドバイザー
2000 (平成 12) 年度	鳥取県鳥取市・福部村・岩美町広域観光振興アドバイザー
2000 (平成 12) 年度	奈良県南和広域連合(五條市、吉野郡)広域観光振興アドバイザー
2000 (平成 12) 年度	日本工人・技の会顧問
2000(平成 12)年度	県境地域の「観光による広域連携」講演講師
2001 (平成 13) 年度	岐阜県立森林文化アカデミー非常勤講師(観光地域実践計画ゼミナール)
2001 (平成 13) 年度	国土審議会特別委員(国土交通省)
2001 (平成 13) 年度	離島政策評価検討委員
2001 (平成 13) 年度	長野県観光開発審議会委員・専門調査員
2001 (平成 13) 年度	長崎県しまの活性化検討会議委員(対馬)
2001 (平成 13) 年度	離島振興法改正検討会議委員

2001 (平成 13) 年度	福島空港国際化と地域づくり研究会委員
2001 (平成 13) 年度	鳥取県観光アドバイザー(鳥取県名和地域/グリーン・ツーリズムの可能性)
2001 (平成 13) 年度	鳥取県日野地域(日野川源流域4町広域連携) 観光まちづくりアドバイザー
2001 (平成 13) 年度	長崎県観光大学観光学研修講座 観光まちづくりアドバイザー
2001 (平成 13) 年度	「温泉を活かした観光振興講演」、雲仙・島原研修アドバイザー
2001 (平成 13) 年度	日本工人・技の会顧問
2001 (平成 13) 年度	「中四国の観光連携を考える」(中四国9県) 講演講師
2001 (平成 13) 年度	「温泉観光地の再生」講演講師(加賀市)
2002 (平成 14) 年度	岐阜県立森林文化アカデミー非常勤講師
2002(平成 14)年度	国土審議会特別委員(国土交通省)
2002(平成 14)年度	長野県観光開発審議会委員・専門調査員
2002(平成 14)年度	長崎県しまの活性化検討会議委員(対馬地区)
2002(平成 14)年度	離島振興法改正検討会議委員
2002(平成 14)年度	福島空港国際化と地域づくり研究会委員
2002 (平成 14) 年度	福井県小浜御食国大使
2002(平成 14)年度	Yダム営業補償検討委員会委員
2002 (平成 14) 年度	「グリーン・ツーリズムは"都鄙連続体"形成の地域振興戦略」論文
2003 (平成 15) 年度	岐阜県立森林文化アカデミー非常勤講師
2003 (平成 15) 年度	国土審議会特別委員(国土交通省)
2003 (平成 15) 年度	観光まちづくりアドバイザー
2003 (平成 15) 年度	離島振興事業評価検討委員
2003 (平成 15) 年度	長野県観光振興審議会委員・専門調査員
2003 (平成 15) 年度	福井県小浜御食国大使
2003 (平成 15) 年度	天竜峡活性化アドバイザー

⁽注)上記内容はジュビオ、ジェド時代のものである。2004年以降2016年まで大学専任教員として参画した委員等は省く。

資料:阿比留勝利氏提供資料より作成